の方に行きかゝる。）

ラムスデン　いやそれはいかん。

ミス・ラムスデン　なぜいけないのです、兄さん。若し眞に身の罪を悔いて居る女であるならば、私は決して追出しはしません。それはオクテヴイアスも知つて居ます。けれど、女が過ちを續けようと云ふに至つては、私はモウおつきあひは出來ません。

アン　まあどうしたと云ふのです？。ヴアイオレットは何と云ひました。

ラムスデン　そりや全くヴアイオレットは意地を張つて居るよ。どうしても倫敦を去らうとは云はない。私には譯が分らない。

ミス・ラムスデン　私には分つてます。あなたの顏に鼻が附いてるほど明かな事です。ツマリ其男、何處の誰だか知らないけれど、それと別れたくないから行かうと云はないのです。

アン　そう、そう、そりやそうなんですよ。オクテヴイアス、あなたもヴアイオレットと話して？。

オクテヴイアス　ヴアイオレットは何んにも話さないんだもの。或人に相談するまでは何とも出來ないと云つて。そして其の或人と云ふのが彼をだました奴に相違ないんだ。

タナア（オクテヴイアスに向つて）それぢや君、其人に相談させたら可いぢや無いか。其人も無論ヴアイオレットを外國に出す事を喜ぶだ

らう。何も困る事は無いぢや無いか。

ミス・ラムスデン（オクテヴィアスの返事を仕ようとするのを遮って）所がそれに困る事があります。私がヴァイオレットを助けるには彼人の惡事の共犯人となる事は出來ません。ですから、彼人が再び其男と會はないと誓言するか、さも無くば誰か外の人の世話になるが宜しい。そして何れにしても早いが宜しい。

女中が戸口に現はれる。アンは急に居ずまひを直して濟ました顏をする。オクテヴィアスも我知らず其の眞似をする。

女中　奥様、お車が參りました。

ミス・ラムスデン　車が？　何の車？。

女中　ロビンソンのお嬢さんのお車です、

ミス・ラムスデン　あゝそうかい！（と我に返り）宜しい。（女中出て去る。）自分で車を呼びにやつたと見える。

タナア　僕は三十分も前から其車を呼びにやらうと云つてるんだ。

ミス・ラムスデン　私は彼子が身の程を知つたのが嬉しい。自分で仕出かした事だもの。

ラムスデン　然しスーザン、こんな風で彼子にこゝを出て行かせるのは私は面白くないと思ふ。あんまり酷な事は仕たくない。

オクテヴィアス　いや、其のお言葉は實に有難う御座います。然しミス・ラムスデンの仰る事が正當です。ヴァイオレットはこゝに居ら

るべき身ではありません。

アン　テヴイ、ぢやあなた一緒に行つてあげたらドウ？。

オクテヴイアス　だつて僕とはイヤだと云ふだらう。

ミス・ラムスデン　そりやイヤな筈です、直ぐに其男の處に行かうとするのだから。

タナア　こゝて有がたい待遇を受けた自然の結果としてね。

ラムスデン（ひどくタナアの言葉を氣にして）　そうれスーザン。あゝいふ事を人に言はれる。そしてそれにも幾分の道理がある。お前の主義もさる事だが、少しは彼子の爲に我慢してお呉で無いか。あれはまだ年が若い。物事には總て時節といふものがあるからな。

ミス・ラムスデン　おや〳〵、男の人は皆んな彼子に同情する。本當に呆れたものだ。

タナア　ラムスデン君、僕も呆れた。然しそれは君に感心したんだ。

ヴアイオレツト戸口に現はれる。少しも後ろめたき樣子のない、落ちついた若き貴婦人で、最も嗜みある女性の一人と見受けられる。其の小い頭と、細い引締つた口と顎、其のテキパキして上品な口のきゝ方と、シヤンとした姿恰好、其の持物に無殘な派出好みをして居ること、例へば剝製の鳥を附けた、頗る氣のきいた帽子の如きが、極めて美しいと同時に極めて恐ろしいと云ふ人物を示して居る。彼女はアンの樣な、人を惑はす妖婦ではない。自分の方から求めぬ時でも、或は自分の方で氣の付かぬ時でも、自然に人の渴仰を受ける。又アンには少しフザける氣味があるが、此人には全くそれがない。恐らく憐みの心も全く無い。若し彼女に何か遠慮する事がある

とすれば、それは思ひやりからではなくて、智慧と誇りとの爲である。それで今彼女が落ちつきはらつた態度で、而も少しく厭々ながら、其の言ひに來た事を語り出した時の聲は、恰かも女教師が、何か不行跡をした女學生の組を叱る時の樣な聲である。

ヴアイオレット　私ちよつとミス・ラムスデンに言ひに來ました。いつぞや私に下すつた誕生日のお祝の、あの透彫の腕環は、あなたのお室に置いてありますから、どうぞお取り下さい。

タナア　おはいりよ、ヴアイオレット。そして善く僕等に話して下さいよ。

ヴアイオレット　有がたう。今朝はモウ親類同志の內輪話に堪能しました。アンのお母さんもモウ弱つて了つて、今泣きながらお歸りになつた。何にせよ私には、私の味方だと云つてる或人達の値打がよく分りました。左樣なら。

タナア　いけない〳〵、ちよつと待つた。僕は是非あなたに聞いて貰ひたい事がある。（ヴアイオレットは些かも色を動かさずにタナアの顏を見る。そして手袋をはめるあひだ立止つて居るのだと云ふ振にて、タナアの云ふ事を待つて居る。）僕は此件に就いて全然あなたに贊成する。僕はあなたがあれだけの事をする勇氣を持つて居たのに對して滿腔の敬意を以てあなたを祝する。あなたの方が全然正しい、親戚の人達が皆間違つて居る。

皆々ハツトとする。アンとミス・ラムスデンは立つて二人の方に向ふ。

ヴアイオレツトは他の人よりも一層驚いて、手袋をはめる事も忘れて、不快と當惑との面持で室の中央にツカ〳〵と進み出る。オクテヴイアスは獨リジツとして顏も上げず、只恥辱の感にくづほれて居る。

アン（タナアに無茶な事を云つて呆れるなと頼む樣に）ジヤツク！。

ミス・ラムスデン（憤然として）私はそれに反對します。

ヴアイオレツト（鋭くタナアに向ひ）あなた、誰から聞きました。

タナア　勿論ラムスデン君とテヴイとから聞いた。それに不思議は無いでせう。

ヴアイオレツト　だつて彼人達は知らないのです。

タナア　知らないとは何を？。

ヴアイオレツト　私の正しい事を知らないと云ふのです。

タナア　何アに、それは彼等も心の中では知つてるんだが、只其の道徳とか、禮儀作法とか云ふような、詰らない迷信の爲に、あなたを責めなければならないと思つて居る。併し僕は知つて居る。實は世間の人も、只そう云ひ得ないばかりで、皆知つて居る。あなたが自然の本能に從つたのは正しい事である。活力と勇氣とは婦人の二大特性であつて、母となる事は即ち嚴肅なる婦道の第一歩である。あなたが法律上の結婚をして居らぬと云ふ事は、あなた自身の眞價に於いても、又あなたに對する我々の敬意に於いても、寸毫の影響する所はない。

ヴアイオレツト（侮辱を感じて躍起となり）マア呆れて了ふ！。あな

たも矢張り外の人と同じ様に私をいたづら女と思つて居る。おまけにあなたは、私が其のあなたの汚らはしい説に同意して居る様に思つて居る。ミス・ラムスデン、私はあなたの嚴しい言葉を我慢しましたが、それは他日あなたが事情を知つて、必ず悔いる時があると思つたからです。然し今の様なジヤックの譽め言葉を戴いて、そんな情ない者と一緒にされては、私はモウ迚も其の侮辱に堪へられません。實は私、夫の爲に結婚を秘密にして居たのですが、今は此の侮辱を免れんが爲に、既婚婦人たるの權利を要求します。

オクテヴイアス（何とも云はれぬ安心の體にて頭を擧げ）　お前は結婚してるのか？。

ヴアイオレツト　そうです。大抵分りそうなものぢやありませんか。あなた方は寄つてたかつて、私が此の結婚の指環を嵌める權利の無い者と極めて了つたのはドウいふ譯です。あなた方は一人だつて其事を私に問ひもしない。私はいつまでも此事は覺えて居ます。

タナア（大いに弱つて）　僕は大失策をした。惡い氣で云つたのでは無いが。何しろ僕はあやまります、平にあやります。

ヴアイオレツト　是からはモ少し氣を付けて物をお言ひなさい。無論、誰もあんな事を眞面目に聞きやしませんが、それにしても餘んまりです。惡い洒落ぢやありませんか。

タナア（此の嵐の前に首を垂れて）　何と云はれても仕方が無い。僕は

モウ是に懲りて今後女の味方なんぞ決して仕ない。我々は皆んなあなたの前に面目を失して了つた。そうでないのはアンばかりだ。アンは初からあなたの肩を持つて居た。どうぞアンに面じて我々を許して下さい。

ヴアイオレツト　えゝ、そりやアンは親切でした。尤もアンは知つて居たんですから。

タナア　えゝ！。

ミス・ラムスデン（角立ちて）　それでは其の紳士は一體何と云ふお方です、自分の妻を承認せぬ其のお方は？。

ヴアイオレツト（迅速に）　大きにお世話様、ミス・ラムスデン。お構ひ下さいますな。私は譯あつて暫くのあひだ私の結婚を秘密にします。

ラムスデン　ヴアイオレツト、誠に申譯がない。お前に對してあんな扱ひをしたかと思ふと、實に私は面目ない。

オクテヴイアス（氣のきかぬ樣子にて）　御免なさいよヴアイオレツト。私は其外に何んにも云へない。

ミス・ラムスデン（まだ負けるのが厭で）　成程、あなたがソウ云へば此の事件の色合ひは大分違つて來る。然しそれにしても、矢張り私としては——

ヴアイオレツト（急に其の言葉を遮りて）　あなたとしては私にあやまるべき筈です。あなた自身に對しても、私に對しても、そうなくてはな

らない筈です。假にあなたが既婚の婦人であるとして御覽なさい。あゝして事務室に入れられて、格別の義務も責任もない、若い娘や年寄の婦人達から、いたづら子か何ぞの樣に扱はれるのは、餘り有がたくはありますまい。

タナア　ねえヴァイオレット、もう我々が負けてるんだもの、其上叩きつけなくても可いだらう。何だか斯う我々は自分で態と馬鹿に成つた樣だけれど、實はあなたが我々を馬鹿にしたんだ。

ヴァイオレット　餘計なお世話ですよ。あなたの知つた事ぢやありません。

タナア　僕の知つた事ぢやない！。でもラムスデン君は、あぶなく僕を其の秘密の紳士にしようとしたんだ。

（ラムスデンは躍起となつて色を變じたが、ヴァイオレットの冷たい鋭どい怒の爲に消されて了ふ。）

ヴァイオレット　あなたを！。マア何といふ淺ましい、何といふ情ない事だらう。あなた方は一躰、私に對して何といふ失敬な蔭口をきいて居たのです。若し私の夫がそんな事を聞いたら、私があなた方の一人に對しても、又と口をきく事をも許しはしますまい。（ラムスデンに向ひ）あなたが居らつしやりながら、せめてそんな事だけは免して下すつても好かつたでせうに。

ラムスデン　ナニそれは其の――ツイ其の私の云つた事を妙に勘

違ひしたので、――

ミス・ラムスデン　兄さん、あなたがあやまるにや及びませんよ。皆んな自分が招いた事なんですもの。自分の方で人を欺した事をあやまるのが當前です。

ヴアイオレット　ミス・ラムスデン、あなたには少し負けて上げます。もつと世間を知つた人に對してなら、私もモット注文があるのですが、あなたには私が此の事件でどんな思をするか迚も分りはしません。それは兎にかく、皆さんがこんな苦しいハメに陷つたのは、私誠にお氣の毒に存じます。それで私モウ一刻も早くお暇した方が一番宜しいだらうと思ひます。左様なら。

ヴアイオレット出て去る。皆々呆れて見やる。

ミス・ラムスデン　私は矢張まだ承知が出來ない。

ラムスデン（悲しげに）　彼子も我々に對してあんまりと云ふものだ。

タナア　ラムスデン君、君も我々と同じく結婚の指環の前には額かねばならない。我々の恥辱は實に極點に達した。

第二幕

第一幕

リチモンドに近き或る山莊の園内なる馬車道に自働車が一臺破損して居る。自働車の後には一群の木立があつて、馬車道は其の木立を廻つて館（やかた）に達するので、館の一部は木立の間から透いて見えて居る。タナアは自働車を右手にして馬車道に立つて居るので、そこからは館の西端が木立に妨げられずに左手の方に見える筈であるが、彼は今、自働車の下から突出て居る、紺のセル地のズボンを穿いた、仰向の二本の足に氣を取られて、呑をかゞめて、兩手を膝に當てゝ、一心にそれを見入つて居る。彼が革の外套を着て先の尖つた帽子（キャップ）を冠つて居る所は、自働車から降りた乘客の一人たる事を示して居る。

足　うまい！　ゝめた。

タナア　もう可いかい？。

足　もうよろしい。

タナアは俯向いて、其の二本の足の踵を持つて、手押車のように其人を引張りだす。其人は兩手で身を支へながら、口に槌をくはへて出て來る。紺のセル地のサッパリした服裝の青年で、髭は奇麗に剃られ、目は黑く、指は太く、髮は短い黑いのがキチンと掻き分けられ、眉は稍不規則な形をして、容易に物を信ぜぬといふ色を見せて居る。彼が車を扱ふ時の動作は、極めて敏捷であつて、而も頗る愼重である。タナア及びタナアの連の人々に對しては、少しも恭々しい態度はなく、只冷然として口數をきかず、隨分露骨によそよそしくして居るが、それでも其の人達に苦情の口實は與へぬだけにして居る。然るに彼は常に其の人達に對して注意ぶかき見張をして、而もそれが、自分は世の中の暗黑面を知り拔いて居るといふ、頗る皮肉な態度である。

彼れの言葉はユックリして、そして諷刺の氣味を帶びて居る。そして其の言葉の中に少しも紳士ぶる所のないのを見ると、其の氣の利いた風采をして居るのは、雇主に對して敬意を表した譯ではなく、自分及自分の階級に對する自尊心からであらうと推測される。

扨、彼は今、器械をためさんが爲に車に乘つて、再び帽子（キャップ）と外套とを着る。タナアは革の外套を脫いで車の中にほりこむ。運轉手は槌をしまひながら、振向いてタナアに問ふ。

運轉手　もう澤山ですかね。

タナア　まあ暫く家にはいつて、足でも延ばして少し神經を鎭めよう。（懷中時計を眺めながら）君知つてるだらうな、ハイドパークの辻からリチモンドまで廿一分で來たんだよ。

運轉手　途中に人さへ居なからうもんなら十五分掛らないで來たんだけれど。

タナア　なぜ又そんなにするんだらう。只走るのが面白いのかね、それとも此の不幸な主人を怖がらせるのが面白いのかね。

運轉手　あなたが何を怖がるんです。

タナア　巡査と、それから首の骨を折るのが怖い。

運轉手　へえ！　そんなにユックリ行きたいんなら、乘合馬車がありまさア。それなら安あがりです。あなたが私を雇ふのは、時間を省いて、そして此の一萬圓の車の値打を出さうとするんぢやありませんか。

（と、靜かに坐る）

タナア　我輩は此車の奴隷だ、そして又君の奴隷だ。此の厄介物の事を我輩は夢にまで見るんだ。

運轉手　ナニ直ぐ馴れまさア。所で、あのお家にお出になりや、どのくらゐ時間が掛りますね。若しお晝までも御婦人方と御話のお積りなら、私は車を厩に廻して休息しまさア。それとも直なら車も此儘にして、こゝらでお出かけまで待つてます。

タナア　こゝで待つて居て貰つた方がいゝ。そんなに長く掛りやしない。アメリカの若い紳士で、マローンとか云ふ人が、米國式の蒸氣自働車でロビンソン君を乘せて來る筈だが。

運轉手（飛びあがつて急に車を降り、タナアの側に來り）　米國式の蒸氣自

働車！。ぢや何ですね、それが倫敦から我々と競爭したんですね。

タナア　多分モウ着いてるんだらうと思ふ。

運轉手　そうと知つたら！。（と、深くタナアを責めるように）あなたはナゼそれを私に知らせて呉れなかつたんです。

タナア　ナゼだつて、此車は一時間八十四マイルまで走れると聞いてるし、それに競爭車がある場合の、君の腕前は我輩が善く知つてるんだから。ねえ君、ヘンリー、君には折々聞かせられない事があるよ。是も其の一つだ。然し喜び玉へ、今日は是から君の思ふ存分やらせるから。其のアメリカ人はロビンソン君の妹君と、それからホワイトフイルド嬢とを乘せる。そして此方はローダ嬢を乘せる筈だ。

運轉手（それで機嫌を直したが、又チヨツト他の事を氣にして）ローダ嬢ていのはホワイトフイルド嬢の妹さんの事なんでせう。

タナア　さうさ。

運轉手　へえ。それでホワイトフイルド嬢は他の車に乘るんですか。あなたと同じ車ぢや無いんですか。

タナア　何んだつて彼人が我輩と一緒に乘るもんかい。ロビンソン君がそちらの車に乘るんだ。（運轉手は受取れぬといふ顏付で冷かにタナアを見たが、ひくい口笛で流行唄の節を吹きながら、自働車の方に向く。タナアは是に少しく氣を損じて何かまだ共事を云はうとしたが、丁度そこにオクテヴイアスの足音が敷砂利の上に聞える。オクテヴイアスは自働車乘の服裝

ではあるが、外套は着ないで、今館の方から出て來る。）ウン有がたい、競爭には負けたんだ。ロビンソン君がやつて來た。やあ、テヴィ、蒸氣自働車は成功かね。

オクテヴィアス　まあそうだね。ハイドパークの辻から十七分でこゝまで來た。（運轉手は憤慨して、不平の唸りを發しながら車を驅る。）君の方は幾らで來たね？。

タナア　ウン、何でも四十五分ばかり掛つたよ。

運轉手（大いに抗辯しながら）もし、もし、タナアさん、ちよいと待つて下さい。我々の方だつて十五分以内で樂に來られたんでさア。

タナア　ウン、時に君を一つ紹介しよう。オクテヴィアス・ロビンソン君。エンリー・ストレカア君。

ストレカア　初めて御目に掛ります。エンリー・ストレカアなんてタナアさんの御冗談ですよ。矢張りヘンリーの事でさア。尤も私はどうだつて構やしませんがね。

タナア　テヴィ。君は又、僕が例の惡い癖で此男をからかふと思ふだらうが、決してそうぢやない。此男の親爺は無暗にHを附けて發音したもんだが、此男は又それよりも烈しく無暗とHを省いて仕樣がない。此男の爲には、それが丁度自分の一族の定紋の樣なものなんだ。凡そ此エンリーといふ男くらね、自分の階級を自慢にする人間を僕は見た事がない。

ストレカア　もし、もし、タナアさん、少し御寛容を願ひますよ。

タナア　御寛容、そうらねテヴイ、あんな言葉を使ふ。君だつたら、モ少し御手柔かにとても云ふ所だらう。然し此奴には教育があるんだからね。そして又、我々に實際學問のない事を知つてるんだからね。何と云つたッけなあ、ストレカア、君の小學校は？。

ストレカア　シヤーブルック・ロード。

タナア　シヤーブルック・ロード！。我々にや迚もそんな風に學者然と、ラグビーとか、パアローとか、イートンとか云へやしない。シヤーブルック・ロードは兎にかく小供に物を教へる處だが、イートンなんぞと來ちや、我々小供が内にゐると邪魔になるもんだから、それに又、我々が大人になつてから、何々公爵の噂なんど出た時に、ありや我輩の同窓てす、なんて云ふ事の出來る爲に、それて皆んなそこに追ひやられる小供置場なんだ。

ストレカア　タナアさん、あなたにや分りませんよ。私等が物を覺えたのは其の學校ぢやありません。工藝學校でさア。

タナア　先生の大學はね、オクテヴイアス。オクスフオードに非ず、ケムブリッヂに非ず、ダラムに非ず、ダブリンに非ず、グラスゴウに非ず、亦彼のエールス地方に於ける非國教主義の諸大學にも非ず。ねえ君、テヴイ。リジエント・ストリート、チエルシー、ボロー……僕は一々面倒くさい其名を覺えちや居ないが、それらの商業區域が即ち彼れの大

學て、我々の大學のように階級的の拘束ばかりを賣る店ぢやないんだ。ねえエンリー、君はオクスフォードを輕蔑してるだらう?。

ストレカア　いえ、そんな事はありませんよ。オクスフォードは全く好い處てさア、そういふ風の向々の方に取つちやねえ。オクスフォードては紳士になる事を敎へるし、工藝學校ては技手か何かになる事を敎へるんてさアね。

タナア　皮肉だよ、君、皮肉だよ！。君が若しエンリーの腹の中に入つて、彼が如何に深く紳士なる者を輕蔑して、如何に高く技手として自ら標致して居るかを見たなら、君は恐らく仰天するだらう。彼は實際此車の破損する事すら喜んてゐる。何故かといふに、其時には即ち此の僕の紳士的無能と、彼れの技術家としての才能熟練とが現はれて來るが故に。

ストレカア　ロビンソンさん、どうかお聞棄になすつて下さい。タナアさんの御話は大業なんてすから。極つてまさア。

オクテヴイアス（眞顏て）　然しあの言葉の底に大いなる眞理がある。僕も勞働の尊嚴といふ事は堅く信じて居る。

ストレカア（一向感心せず）　そりやロビンソンさん、あなたがまだ少しも勞働をやつて御覽にならないからてす。私の職分は勞働を省くのてす。私一人と器械が一臺あれば、勞働者廿人よりも餘計な仕事をします。そしてそんなに飲みもしませんや。

タナア　オイ君テヴイ、經濟學の話を初めさせちや大變だ。彼は其の方は十分に心得て居るが、我々は何にも知らない。君は詩的社會主義者に過ぎないが、彼は科學的社會主義なんだ。

ストレカア（平氣で）　そうです。時に大變有益なお話ですが、私や是から車の世話をしなきやなりませんし、あなた方は又お二人で御婦人達の御話があるんでせう。分つてます。（彼は退いて車の世話を爲し、やがてそこを立去り、館の方に歩みゆく。）

タナア　實に重大なる社會現象だ。

オクテヴイアス　何が？。

タナア　あのストレカアがさ。此の數年來、我々文士學者連は、少し並外れの舊式の婦人を見ると、頻りに『新しい女』といふ叫びを擧げたもんだが、『新しい男』の來降には少しも氣が付かずに居た。ストレカアは即ち『新しい男』なんだ。

オクテヴイアス　何もあの男に新しい所なんぞ少つともありやしない。君の冷かし方が新しいばかりさ。然し僕はあの男の事よりか、少しアンの事を君に話して置きたい。

タナア　ストレカアはそれも知つてた。恐らくそれも工藝學校で學んだんだらう。所で、アンがどうした。君、言ひだしたんか。

オクテヴイアス（さも惡かつたといふ體にて）　實に亂暴だつたけれど、昨夜とう〳〵言ひだしたよ。

タナア　亂暴だつたけれど！。そりやどういふ譯だね。

オクテヴイアス（熱情をこめたる聲にて）君、我々男子は皆な粗放だよ。婦人の感情が如何に微妙なものであるかは到底男に分らない。僕はマアどうしてあんな事をしたんだらう！。

タナア　どんな事をしたんだよ。弱蟲だねえ、君は。

オクテヴイアス　そうだよ、僕は弱蟲だよ。だけど君マアあの聲を聞いて見玉へ、あの涙を見て見玉へ。僕は昨夜そればッかり考へて夜どほし眠らなかつた。アンが若し僕を責めたのなら、僕はまだ我慢がしよいのだけれど。

タナア　涙！そいつは危險だ！。アンは何と云つたね。

オクテヴイアス　今の場合、お父さんの事より外に、物を思ふ心の暇が無いと云つたよ。そしてヤットの事で啜泣を抑へて居たよ。（ぐんにやりとショゲて了ふ。）

タナア（其眷中を叩きながら）オイ君、確かりしなくちやいかんぜ。馬鹿だなア。お定まりの古い手ぢや無いか。アンはまだ君をおもちやにし足りないんだ。

オクテヴイアス（堪りかねたといふ體）馬鹿を云つて呉れるなよ君。君のその薄ッぺらな、引きりなしの惡體口が、アンの樣な氣立の女に少しでも當てはまつて堪るものかい。

タナア　成程！。で、アンはまだ外に何か云つたかい。

オクテヴイアス　云つたよ。だから僕は今、君に冷かされると知りつゝ其事を話しに來たんだ。

タナア（少し心苦しき體にて）オイ君、テヴイ。僕は冷かすんぢや無いよ、斷じて。だけどマアそれや可いや。話し玉へ。

オクテヴイアス　一體アンは義務の觀念が實に痛切で、實に完全で實に——

タナア　ウン、そりや分つてるよ。それて？。

オクテヴイアス　それてさ、君とラムスデンとが、今度の取極で、アンの後見人になつてゐる。それてアンの心ては、父に對する總ての義務は、今ては悉く君等に移つて居る。それて此事に就いても、先づ一番に僕から君等兩人に話すべきだとアンは云ふんだ。勿論そりや其の通りさ。だけど何だか斯う、僕が今改まつて君の前に出て、君の被後見人に對して求婚者たるの承認を求めるなんて、あんまり馬鹿々々しい樣な氣がして仕樣がない。

タナア　テヴイ、君が戀愛（ラヴ）の爲にまだ全く滑稽の趣味を失はなかつたのは嬉しいね。

オクテヴイアス　そんな返事をしたつてアンが得心しやしない。

タナア　我輩の改たまつた返事は勿論斯うだ。願はくば二人の上に幸ひあれ。お芽出たう！。

オクテヴイアス　君、冗談はモウ好い加減によしてくれよ。是でも

僕に取つちや、又アンに取つちや、實に眞面目な事なんだから。

タナア　然しアンが君と同じく、配偶を擇ぶの自由を有して居る事は分り切つてるぢやないか。

オクテヴイアス　所が、アンはそう思はないんだから。

タナア　アンがそう思はない！。如何にもねえ！。然しマア好いや、それで僕にどうしろと云ふんだね。

オクテヴイアス　只君が飽くまで眞面目に、僕について君の見る所をアンに話して呉れゝばいゝのだ。ツマリ、君が僕を以てアンを托するに足る男だとして呉れゝばいゝのだ。若し君が實際そう思つて呉れるならば。

タナア　アンを君に托するのは勿論大丈夫だがね、只君をアンに托するといふのが僕の氣遣ふ所だ。君はメーテルリンクの蜂の本を讀んだかね。

オクテヴイアス（辛うじて不機嫌を抑へながら）　僕は今、文學を論じてるんぢやない。

タナア　マア少し我慢して聞き玉へ。僕も文學を論じてるんぢやない。其の蜂の本は博物學だ。そして人間の爲に非常な教訓になる。君は今アンの求婚者だと思つて居る。君が追ひかけて、アンが追ひかけられてると思つて居る。即ち君の方から持ちかけて、說きふせて、納得させて、そして手に入れるものだと思つて居る。馬鹿だね。實は君

の方が追ひかけられて、敵に目星を付けられて、獵の獲物と極まつて居るんだ。何もそんなに鼠罠の網の外から、欲しそうな顔をして餌を眺めて居るにや及ばない。戸はチャンとあいてる。いつまでもあいてる。そして君が其中に這入ると、初めて其後戸が永久に閉まるんだ。

オクテヴイアス　君は隨分ひどい言方をするが、僕も實はそう信じたい。

タナア　まあ君考へて見玉へ。女の身に夫を持つより外の仕事がどこにある。それで一日も早く結婚しようとするのが女の務、一日も永く結婚せずに居ようとするのが男の務となる。君は詩を作つたり、悲劇を作つたりするが、アンのする事は何んにもありやしないぢやないか。

オクテヴイアス　僕はインスピレーションがなくては書けない。そして僕にインスピレーションを與ふる者はアンの外にない。

タナア　アンからインスピレーションを得ようとするんなら、もつと遠方からの方が安全だぜ。昔のペトラークがローラを見たのも、ダンテがビアトリスを見たのも、君がアンを見る樣にそんなによく見たんぢやない。それでも彼等はあのとほり名歌を作つてる。と、マアいふ事だ。彼等は蓋し其の偶像崇拜を家庭生活の試金石には掛けなかつた。それで其の崇拜が一生涯續いて居た。君が今アンと結婚して見玉へ、一週間も立たうもんなら、アンのインスピレーションは消えて

了つて、輕燒煎餅の一皿ぐらゐなものになつちまふよ。

オクテヴイアス　ぢや君は僕がアンに飽きると思ふのか。

タナア　そうぢやない。君はいつまでも輕燒煎餅を食ふが、只其中にインスピレーションが無くなる。そして彼女が既に詩人の夢に適せず、十八貫もあるドツシリした細君になると、君もモウ彼女に慣れて了ふ。そして又何處か他の人を夢みる事になる。サアそれからが騷ぎになる。

オクテヴイアス　君もうそんな話はよして呉れ。君に分るもんか。君はまだ戀をした事も無いぢやないか。

タナア　僕が！僕は未だ曾て一日も戀を忘れた事がない。アンにだつて僕は矢張り戀をしてゐる。只僕は戀の奴隷ともならず、ヤツコともならない。オイ詩人、ちと蜂の遣方を考へて見玉へ。そして少し利口になり玉へ。ほんとだよテヴイ、若し女が我々の働きに依る必要がなくて、そして我々が自分ではパンを作らずに、小供のパンばかり取つて食つて居たら、女はキツト我々を殺すよ。女蜘蛛が男蜘蛛を殺し、働き蜂がなまけ者の男蜂を殺す樣に。そしてそれも當前さね、我々が若し戀の外に何の役にも立たないとすれば。

オクテヴイアス　いや〳〵、我々が戀の役に立てばそれで十分だ。凡そ世の中に戀に比ぶべき者は無い。戀の外に物は無い。戀が無くては世は只醜惡無殘の夢だもの。

タナア　おや〳〵、是が我々の被後見人の手を取らうとする人物なのかな！。オイ君、君と僕とは赤坊の時に取替へられたのかも知れないぜ。君こそ本統のドン・ジュアンの血統だ。

オクテヴィアス　そんなことを君、少しでもアンに云つちやイケないよ。

タナア　大丈夫。アンはもう君に目星を附けてるんだ。外しッこはありやしない。君はモウ運の盡だ。（ストレカア新聞紙を持ちて出で來る。）ヤア又『新しい男』が、例の通り安新聞に夢中になつてやつて來た。

ストレカア　ロビンソンさん、まあ聞いて下さい。私達が二人で自働車で出かける時には、いつも新聞を二枚持つて行きます。タナアさんのが『タイムス』、私のが『リーダー』か『エコー』。所が、私が私の新聞を見ることなんぞありやしませんや、滅多に。『リーダー』はタナアさんが引ッたくつて了つて、私にや面白くもない『タイムス』をあてがつて置くんです。

オクテヴィアス　『タイムス』には當り籤が出て居ないのかね

タナア　エンリーは賭事はやらないんだよ、君。只自働車のレコードだけに夢中なんだ。最新のレコードはどうだい？。

ストレカア　巴里ビスクラ間、平均一時間四十マイル、地中海は別にして。

タナア　幾ら殺された？。

ストレカア　のろまの羊が二疋。そんなと平氣てさ。羊なんぞ幾らも仕やしないし、飼主も代金さへ拂つて貰や、肉屋まて賣りに行く世話が無くて喜んてまさア。だが、今に御覽なさい、矢張何のかのと攻擊がありまさア。そして佛蘭西の政府が差止めまさア。そうするとモウ我々のやる時はありやしない。ねえ、そうてせう。それを思ふと、私や本當に厭になッちまふ。今ならまだ出來るんだけど、タナアさんは迚も思ふ存分走らせて呉れやしない。

タナア　テヴイ、君は僕の小父のジエームスを覺えてるか。

オクテヴイアス　あゝ。なぜ？。

タナア　あの小父はね、名人のコックを雇つて居て、それの料理した物てなくちや消化が出來なかつたんだ。所が、小父は內氣な男て、世間に交際する事なんぞ嫌だつたけれど、其コックは又腕自慢て、公爵だの大使だのといふ人々に御馳走を出したがつてゐたんだ。そこて小父は其コックの足を止めたいばかりに、可愛そうに、毎月二度盛宴を張つて、その厭な思ひを我慢して居たんだ。サア所が、それが今度は僕と此の『新しい男』エンリー・ストレカアといふ先生なんだ。僕は旅行は大嫌ひだが、此男は少々氣に入つてる。然るに此男は皮の上衣に塵防眼鏡て騷ぎまはり、全身に埃の二寸ばかりも積らして、そして一時間六十マイルの速力か何かて、自分の命と僕の命とを危險に曝すより外に

道樂は無いんだ。尤も、器械に狂ひが出來て、自働車の下に這ひこんで、泥の上に仰向になつてそれを直す時だけは別だらうがね。所で何さ、僕が少くとも二週間に一度、一千マイルの遠乘をやらせなからうものなら、先生すぐに僕に暇を呉れて、アメリカの富豪の處にでも行つちまふんだ。そうすりや君、僕はあの御丁寧な、馬鹿に恭々しい、一々帽子に手を當てたりする、庭男兼帶の素人でも雇ひこんで、我慢しなくちやならない事になるんだ。だからさ、丁度僕の小父が其コックの奴隷になつてたと同じに、僕は此エンリーの奴隷になつてるんだ。

ストレカア（プン〳〵して）馬鹿々々しい！。タナアさんの口ほど早く走る自働車がほしいもんだ。私は、折角の自働車を使はなくちや金が損になると云ふんです。若し自働車と私とを使へるだけ使はないほどなら、いつそ乳母車に乗つかつて子守娘に押させりや可いんです。

タナア（なだめるように）いゝよ君、ヘンリー、いゝよ。今すぐ又三十分ばかり乘るから。

ストレカア（さもいやらしく）三十分ばかり！。（自働車の方に行き、それに打乘り、又新聞を擴げて讀む。）

オクテヴイアス　おう、それで思ひだした。ローダから君に手紙をことづけたよ。（タナアに手紙を渡す。）

タナア（手紙を開きながら）多分これやローダがアンと悶着を初め

だしたね。凡そ英吉利の女の子が、母親を嫌ふより以上に嫌ふ人が只つた一人ある。それは外でもない、總領の姉だ。然しローダは又格別にアンよりも母親の方が好なんだ。一體あれは――（憤慨の口氣にて）オヤ！是は怪しからん。

オクテヴィアス　何だい？。

タナア　ローダは僕と一しよに自働車に乘つて行く筈になつてるんだ。それをアンが、僕と一しよに行く事はならんと云つて止めたと云ふんだ。

此時ストレカアが頓に又例の口笛の歌を始める。それが如何にも癪とらしく聞える。二人は此の雲雀の聲の樣な歌の急に起つたのに驚き、又その快活な調子の中に人を馬鹿にしたような節まはしのあるのに氣を奪かれて、一しよに振向いて、何だといふ樣にストレカアの顏を見る。けれどもストレカアは一心に新聞を讀んで居るので、其儘となる。

オクテヴィアス（向き直りて）　何とか其理由が示してあるかね？。

タナア　理由！。侮辱に理由なんぞあるもんか。アンは如何なる場合にもローダと僕と二人きりで居てはイケナイと云ふんだ。僕は少女と交るには不適當な人物だと云ふんだ。所で君は今、君の模範婦人の事をどう思ふね？。

オクテヴィアス　君そこは善く考へてやらなきやならないよ。父親が無くなつて見ると、アンの責任は非常に重いんだからね。ローダは迚もホワイトフィルド夫人の手にや合はないし。

タナア（オクテヴィアスを見つめて）　要するに君はアンと同説だね。

オクテヴィアス　そうぢやない、けれども僕にはアンの心持が分るんだ。君の主義が、少女の性格を養成するに少し不適當だと云ふ事は君も許すだらう。

タナア　そんな事を許すもんか。僕は只、世間で少女の性格を養成すると云ふのは、大抵ウソばかり云つて聞かせる事だと云ふ事を許すね。然し僕が女子の信任を濫用する男だと云ふ樣な、そんなウソを云つて聞かせる事には反對するよ。

オクテヴィアス　アンはそんなことを云やしないよ、君。

タナア　ぢや何んと云ふんだ。

ストレカア（アンが館の方から來るのを見つけて）　ホワイトフイルド嬢が見えましたよ。（彼は自働車を降りて、モウ已に用事は無いのだと云ふ樣な見えで、ブラ〳〵大通りの方に歩み去る。）

アン（オクテヴィアスとタナアとの間に出て來り）　お早う。あのね、ジヤック。ローダは又いつもの頭痛がして、今日あなたと一緒に自働車に乘れないの。可愛そうに、あの子はそりや失望して居たわ。

タナア　さア君はどう思ふ、テヴィ。

オクテヴィアス　君、誤解しちやいかんよ。アンは君に遠慮をしすぎて、それでツイ君を欺く事にも成るんだ。

アン　あなた方、なぜそんなこと云ふの？。

タナア　アン、あなたはローダの頭痛をなほしてやりたいと思ふかい？。

アン　無論だわ。

タナア　ぢや今云つた通りをローダに云つて御覽。そして僕がローダの手紙を受取つて、それを讀んでから丁度二分間の後に、あなたがこゝに來たんだと云つて御覽。

アン　ローダがあなたに手紙をよこしたつて！。

タナア　何もかも皆んな書いてある。

オクテヴィアス　構やしないよ、アン。あなたに惡い事はない、少しも惡い事はない。アンは君、只義務を盡したのだよ。それは君にも分つてるだらう。而も君、最も親切に義務を盡したのだよ。

アン（オクテヴィアスの方に寄り）　あなた本當に親切だわねえ、テヴィ。私本當に助かるわ。あなた本當に善く私を理解して呉れるわねえ。

（オクテヴィアス得意の色を浮べる。）

タナア　そうらトグロが締まる。テヴィ、君はアンを愛してるんだからねえ。

オクテヴィアス　それはアンも善く知つてるさ。

アン　まあ、テヴィ！いやだわ、そんなこと。

タナア　何アに僕が許す。僕は後見人だ。僕は是から一時間、あなたをテヴィに托する。僕はチョット自轉車で一廻りやつて來る。

アン　いけませんよ、ジャック。私あなたにローダのことを話さなくちゃならない。リッキー、あなた内に行つてアメリカのお客のお相手をして下さいな。お母さんは朝ッぱらから彼人につかまつて、まだ臺所の御用も濟んで居ないんだから。

オクテヴイアス　あゝいゝとも。ぢや僕ア行くよ。（と、アンの手にキスする。）

アン（やさしく）　リキ、チキ、テヴイ！。

（オクテヴイアスは顏を赤めて、心ありげにアンを打見やりて走り行く。）

タナア（ずけ〳〵と）　サアどうだい、アン。今度は參つたな。テヴイは、もう手の附けられないほど、あなたに惚れこんでるんだから仕方がないけれど、それでなきや、あなたが數の知れないウソつきだと云ふ事が分る筈なんだ。

アン　そりやあなたの誤解だわ、ジャック。私テヴイにや在の儘が云へなかつたんだもの。

タナア　在の儘が云へないで、其代りウソが云へるんだ。僕の樣な惡い奴と一緒に居てはイケナイなんて、どうしてそんな事をローダに云ふんです。そんなひどい事をしてローダの心に毒を盛つちや、モウ僕とローダと人間らしい本當のッキアヒは出來やしない。

アン　そりや、あなたに惡い事の出來ないのは私知つてるけど——

タナア　それになぜローダにウソを云つたんです。

アン　仕方が無かつたんだもの。

タナア　仕方が無かつた！。

アン　お母さんがソウ云へと云つたんだもの。

タナア（眼をキラリと光らせて）あゝそうだッたつけ。お母さんが！。いつてもお母さんだ。

アン　それもあなたの、あの恐ろしい本からの事だわ。母はあの通りの臆病者てせう。臆病な女は皆んな月並になるの。月並にならなきやあなた、そりや恐ろしい、ひどい誤解を受けるんだもの。御覽なさい、男だつても矢張そうだわ。現にあなたが思ふ通りの事を云へば、直ぐに誤解されてひどく云はれるぢやありませんか。正直な所、私もあなたのこと惡く云つたわ。仕方が無かつたんだもの。それてもあなた矢張そんな風に、あのローダを誤解させて、人に惡く云はせたいと思つて？。母の身としては、ローダが自分で物事を判斷する程の年頃になるまて、そんな目に遭はせない様にするのが當然ぢやなくて？。

タナア　要するに、誤解を避くるの道は、何人に取つても、只出來るだけ、きつくウソを云ひ、蔭口を云ひ、あてこすりを云ひ、體のいゝことを云ふに在るんだ。あなたのお母さんに從ふ結果はそうなるんだ。

アン　だつてお母さんだもの、あなた。

タナア（社會學的の憤慨を發して）幾ら母、親に對してだつて、自分の心を自分の者にして惡いと云ふ理由は無い。僕は斷じて斯くの如き、老

人に對する青年の屈從に反對する。マアあの交際社會の有樣を御覽なさい、あなたも知つてるぢやないか。其の表面よりしてこれを見れば、如何にも麗はしき仙女のダンスであるが、其の實際よりして之を見れば、ミジメな娘共が凄まじい行列をして、それが皆んな母親と稱せらるゝ、殘忍な、狡猾な、貪慾な、熱の冷めた、無智の經驗を積んだ、心の汚れはてた老婆の爪に掛つて居る。そして其の母親たる者の任務は、娘の心を腐敗させて、最も高き價を拂ふ者に賣附けようとするに在る。然らばなぜ又それ等の不幸なる奴隷が、全く結婚せずに終るよりか、どんな老人でも惡漢でも構はず、直ぐに誰とでも結婚するかといふに、それは斯うである。其の母親と稱する老ぼれの惡魔は、親の義務といひ、子に對する思愛といふ假面の下に、自分の身勝手な野心と、自分に取つて代つた若き競爭者に對する嫉妬憎惡の念を押しかくして居るが、娘の身としては、結婚といふ事が其の毒手より逃れる唯一の手段である。斯くの如きは實に言語道斷の次第であつて、天然の聲の命ずる所に依れば、女の子は父親が之を世話し、男の子は母親が之を世話すべきである。彼の男の子は父に附き、女の子は母に附くといふは、決して愛の法則でない。天然の聲は革命の法則であり、解放の法則であり、有力の青年を以て衰殘の老人を壓伏するの法則である。そこで宜しいか、成年に達したる男女の第一の義務は獨立の宣言である。我父の權威を擁護する男は男子にあらず、我母の權威を擁護する女は、自由民の爲に其の子

孫を産むに足る者にあらず。

アン（一種の好奇心を以て、じつとタナアを見て居たが）あなたは今にキツト本當に政治家になるんだわねえ。

タナア（すつかり腰を折られて）エエ？何？何だつて？（といふ中漸く少し落ちついて）一體それが僕の今云つたことゝ何の關係があるんです。

アン　お喋りが旨いんだもの。

タナア　お喋り！お喋り！。あなたにや今云つた事が只お喋りと聞えるんだね。宜しいぢやモウお母さんの處に行つて、一緒にローダの心に毒を盛るがいゝ。あなたもそんなにして毒を盛られて來たんだ。馴れた象は野生の象を捕へる事を樂むもんだ。

アン　私も少しづゝ立身するわねえ。昨日は巨蟒だつたが、今日は象になつた。

タナア　さうさ。だから早く其の鼻を片づけて彼方に行くがいゝ。僕はモウあなたに云ふ事は無い。

アン　あなたそれぢや丸つきり無理だわ、無茶だわ。私どうすりや可いの？。

タナア　やるさ！鎖を切るさ。母親にばかり從ふことを止めて、自己の良心に依つて行動するさ。あなたの其心を純潔に强固にするさ。下らないケチな企らみの言譯なんぞばかり仕て居ないで、ちと自働車

を驅つて疾走する愉快でも味ふが可い。僕と一緒にマルセイユに行つて、アルジールに渡つて、ビスクラまで行つて見ようぢやないか、一時間六十マイルの速力で以て。若しお望みならズウット喜望峰まで行つてもいゝ。それこそ實に猛烈な獨立の宣言だ。そして後であなたが其事を書いて本にでもするといゝ。それこそお母さんを閉息させて了つて、あなたが一人前の婦人に成るの道だ。

アン（分別らしく）それにや何も別に惡いことないと私思ふわ。あなたは私の後見人で、父の望に從つて父の代理に立つて居るのだもの、二人で一緒に旅行したつて誰も何んとも云へやしない。キット面白いわ、そりや。本當に有がたうよ、ジャック。私行くわ。

タナア（呆れて）行く!!!

アン　えゝ行くわ。

タナア　だつて——（全くモウ呆れ返つて言葉がとぎれる。それから漸くの事で後がつゞく。）それはイカンよ、アン。若しそれが別に惡い事でないといふ程なら、それをやる理由が無くなつちまふ。

アン　馬鹿なこと仰しやいよ。あなた私に惡名を立てさせたか無いでせう。ね？。

タナア　いや立てさせたい。それが即ち僕の提案の主意なんだ。

アン　冗談も大抵におしなさいよ。あなたが私の爲にならないことする筈が無いぢやありませんか。

タナア　いゝや、若し惡名を立てられたくないなら來ないがいゝ。

アン（無邪氣に思ひこんだ樣子で）うゝん私行くわ、ジャック。あなたが來いと云ふんだもの。あなたは私の後見人で、お互にモット永く一緒に居て、モット善く知り合つて置いた方がいゝんだもの。（感謝するらしく）あなたはねえジャック、こんな好い遊山を勸めてくれるなんて、本當に思ひやりがあつて、本當に親切だわ。殊に私今ローダの事であんなこと云つた後だから猶嬉しいわ。あなたはねえ、自分に思ふよりかズットもつと善い人ですよ。それで何時立つの。

タナア　だつて——

此會話は、ホワイトフイルド夫人が館からこゝに出て來たので妨げられる。夫人は彼のアメリカ紳士と連れ立つて、其後にはラムスデンとオクテイアスとが續いて來る。

（クトル・マローンは東部アメリカの人であるが、少しも其の國籍を恥ぢて居らぬ。さこが英國のハイカラ連中の氣に入つて、奴は見す〳〵知れた自分の不利益を顧さうとも輕めようともせず、白狀して了ふところが男らしいと云はれて居る。そして是ほど明瞭に自分の罪でない事の爲に、辛い思をさせるのは善くないと云ふので、皆が彼に向つて特別に親切を盡す事にして居る。然し彼れの婦人に對する慇懃の態度と、仰々しい道德呼ばゝりとが、餘りに譯もない、並はづれの遣方であるので、それには皆も少し困つて居る樣子である。彼れの口輕な上調子は、初こそ少し人を困らせるものゝ、慣れて見ると存外誰も面白いと思ふ樣になるが、然しそれにしても、人々は彼に對して、滅多に人の噂などしてはならぬ（尤も、極々内密の醜聞なんぞは別であるが）といふ事を悟る樣に仕向けて居る。又辯舌といふ事は、彼が

今渡來した此國よりも一段野鄙な文明の素養だといふ見識である。然るにヘクトルの方では一向其邊の考へに服して居らぬ。彼から見れば、英國人は兎かく自己の足らはぬ所を手柄にして居る。自分の色々な缺點をば、そこが即ち育ちの善い所だと思つて居る。又、英國の生活には教訓的の言葉使ひ(即ちヘクトルの謂ゆる道德的風氣)が缺けて居る。英國人の行儀は婦人に對する尊敬が不足して居る。英國人の發音は World, girl, bird などいふ語に於いて其卷舌が甚だ卑しく聞える。英國の社會は隨分物事を露骨に話して、場合に依つては許す可らざる粗野に流れる事がある。英國の交際は賭事とか、物語とか、其他の遊戲とかに依つて今少し賑やかにすべきである。斯くて、ヘクトルは大西洋を横ぎつて英國に向ふ前、大いなる苦心を以て當世第一流の素養を作つたのであるから、今に及んで前記の諸缺點を學ぶべき義務があるとは思つて居らぬ。ヘクトルより見れば、英國人は右の如き素養に就いては(何の素養に就いても同樣だが)一向無頓着で、さもなければ敬して之を遠ざけて居る。所が、實を云へば、ヘクトルの素養なる者は、三十年前に英國から輸出した文學にかぶれたに過ぎないもので、それを彼は今日逆輸入して、談話の機會のある度毎に、即座に其荷を開いて、英國現在の文學、科學、藝術の上に眞向からそれを投げ下さうといふのである。斯かる突擊に對して、人がアツケに取られて居ると、彼は之を以て、自分が英國を敎育するに與かつて力があるのだとして、大いに自惚れる事になる。人がアナトール・フランスやニイチエに就いて無邪氣に語り合つて居ると、彼は忽ち其中に割つて入つて、マシユー・アーノルドや、ホルムスの『朝の食卓の專制家』や、或はマコーレーまでも擔ぎ出して、散々一座を荒して了ふ。又彼は元來敬虔な信者風であるのだが、兎かく不謹愼な滑稽を云ふので、ツイ不注意な人は、彼と道德問題を論議する時、世俗の神學などを論外に置いて掛る事になる。すると彼は其時になつて、急に開き直つて、抑々我が行爲の理想とする所は、即ち正直なる男子と純潔なる婦人とを作らんとする、彼の柔

能の神の聖示にあらざるか、などゝ相手を煙に巻いて了ふ事がある。斯くて彼れの風采は極めて新味を帶びて居るのと、彼れの素養の恐ろしく古臭いのとを見ると、此人物の果して交るに足るか否かを判定するに非常の困難を感ずる事になる。彼と交際すれば如何にも面白く、如何にも愉快ではあるが、さりとて智識上に於いて何等新しい者を彼から得る事は出來ない。殊に彼は政治を賤み、又彼が其の友なる英國の資本家連よりも恐らく大いに長じて居るところの、商業上の話をするのを力めて避ける樣にして居るので、猶更人は彼より何の得る所もない。それで彼は戀愛派の古風なクリスチアンと最も善く氣が合ふのである。オクテヴイアスとの間に友情の成立つたのは即ちそれが爲である。

容貌を云へば、ヘクトルは廿四歳の身綺麗な青年で、短い、氣の利いた、黑いぱと、涼しい恰好のいゝ眼と、人好のする陽氣な表情を持つて居る。世上一般の見地よりすれば、彼れの服裝は申分なく出來てゐる。今ホワイトフイルド夫人と連立つて、館の方より車道をやつて來る時、如何にも勉强して夫人の機嫌氣褄を取り、そのため餘り氣の利かぬ夫人の上に堪へ難き重荷を負はせて居る。是が英國人ならば、別にそんな擔ひ立をせず、二人共に手持無沙汰で冷淡にして居る所であらう。そして夫人も亦、そんな風に構ひ立をせずに棄てゝ置かれるか、さもなくば勝手に好な事を喋らせて貰ひたいのである。

ラムスデンはブラリ〳〵と自働車の側に寄りてそれを見る。オクテヴイアスはヘクトルと一緒になる。

アン（嬉しそうに母親に飛びつき）あのねえ、お母さん、聞いて頂戴！。ジヤツクがねえ、私を自働車に乘せて佛蘭西のニスに連れて行くッて、好いわねえ。私今、倫敦中で一番仕合せな人だわ。

タナア（少々やけに）ホワイトフイルド夫人は反對てせう。無論反

對てせう。ねえラムスデン君。

ラムスデン　左樣。或はそうかも知れない。

アン　あなた反對ぢやないわねえ、お母さん。

ホワイトフイルド夫人　私が反對する！何て私が反對するものかね。そりやお前、キツト體の爲になりますよ。（タナアの方にツカ〳〵と寄り）私あなたに、折々ローダを連れて出て戴きたいと思つてたのですよ。彼子は内にばかり引込んで居て仕樣がありません。尤もそれは又お歸りなすつてからでも宜ございますが。

タナア　僞りの淵の底に又一つ淵がある！。

アン（此の叫びに對する、人の注意を他にそらさうとて、早口にて）　オ、私忘れてた。あなたまだマローンさん知らないわね。御紹介します。私の後見人タナアさん。ヘクトル・マローンさん。

ヘクトル　初めてお目に掛ります。所でタナアさん、ニス行のお仲間に私も差加へて戴く譯に參りませんでせうか。

アン　アラ皆んな一緒に行くんでせう？。そうだわねえ。

ヘクトル　私も詰らないのですが自働車を一つ持つて居ますから、若しロブンスン孃が御許し下さいますなら、御一緒に乘せて戴きます。

オクテヴイアス　ヴアイオレツトをですか？。

一同ハツとして互に氣を兼ねる。

アン（小聲にて）　お母さん、入らつしやい。色んな打合せは男の人達に任せて置けばいゝ。私は手提の用意をしなきやならない。

ホワイトフイルド夫人は少しまごついた樣子であつたが、アンが人目だたずに引張つて、そこの角を曲つて館の方に姿を沒して了ふ。

ヘクトル　甚だ差出がましい申分ですけれど、ローブンスン嬢が御承知下されば宜しいのでせう。

一同白けわたる。

オクテヴイアス　どうも、ヴアイオレットは内に置かなくちやなりますまい。あれにはチト譯があつて、そんな旅行なんどに行かれないのですから。

ヘクトル（面白がつて、少しも得心せず）　そこはアメリカ流ですね。ローブンスン嬢にはお附人でも無くてはイケないのですか。

オクテヴイアス　そんな事ぢやありませんよ君、――少くともそんな事ばかりの爲ぢやありませんよ。

ヘクトル　へえ！それぢや、外にどんな御差支があるんでせう。

タナア（堪りかねて）　話した方がいゝよ、話した方がいゝよ。秘密を保つにや皆に知らせて了ふより外に法はないんだ。マローン君、君がヴアイオレットをニスに連れて行くとすれば、即ち他人の妻を連れて行く事になるんです。ヴアイオレットは結婚してるんです。

ヘクトル（仰天して）　え！そりやほんとのことですか。

タナア　本當です。但し内々です。

ラムスデン（身分違の結婚などゝ思はれてはならぬと、精々威儀を繕ひて）あれの結婚はまだ披露して無いのですからな、今のところ知らぬ貌にして置いてくれと本人が申すのです。

ヘクトル　御本人の御望みとあれば、それは私も尊敬いたします。然し其夫たる人が誰方であるか承たまはる譯に參りますまいか。さすれば此の旅行に就いても、其の方に御相談申上げたいと存じますが。

タナア　其れが誰だか分らない。

ヘクトル（戀とらしく、貝が殼の中に身を引込める樣にして）それならば、モウ何も申す事はありません。

皆々以前よりも一層白けわたる。

オクテヴイアス　嘸君は妙な事だと御考へでせう。

ヘクトル　少しおかしな譯ですね。失禮な申分ですけれど。

ラムスデン（半は言譯らしく、半はブン〳〵して）ヴアイオレットは秘密に結婚したのです。そして其夫が、姑く其の姓名を人に明す事を禁じたものと見えます。所が、あなたは彼子に對して心を掛けてお居での樣にも見えますから、それで是だけは御話して置くのです。

オクテヴイアス（思ひやりありげに）是がため君が失望なさらなければいゝがと僕は案じて居ます。

ヘクトル（打解けて、再び貝殼より出て來り）いや全く僕には打擊です。

然し其人が妻たる者をどうしてそんな目に會はして置くか、僕にや殆んど分りませんな。習慣にも背くし、男らしくもないし、思ひやりもないし。

オクテヴイアス　御察しも下さるてせうが、我々も實に深くそれを感じて居るのです。

ラムスデン（ムラ〳〵して）いづれ無經驗な馬鹿青年でせうよ。こんな事を秘密にして置くと、どんな始末になるかと云ふ事も知らんで。

ヘクトル（著しく道德的反感の徵候を示し）　そうですなア。よく〳〵年の若い者で、而もよほどの患者で無い限り、斯樣な行ひを宥恕する譯には行きますまい。ラムスデンさん、あなたは隨分溫和な御意見ですね。私から見れば、餘り溫和に過ぎて居ます。元來、結婚は男子の氣品を上げる筈のものであるのに。

タナア（冷笑的に）　ハア！。

ヘクトル　タナアさん、今の御冷笑は私の說に御反對の意味ですか。

タナア（冷然と）　結婚して試して御覽。暫くのあひだ愉快な位の事はあるだらうが、氣品なんぞ上りはしないから。男と女の最大公約數は、どうしたつて男ひとりの約數より大きくなり樣がない。

ヘクトル　然しアメリカでは斯ういふ風に考へますね。婦人の道德心は總じて男子よりも高い。それで婦人の純潔な性情が自然に男子の心を高めるそして以前よりもズット善い人間にする。

オクテヴイアス（斷乎として）全く其の通りです。

タナア　道理で、アメリカの女が歐羅巴に住みたがる。一生涯、神棚に上げられて拜まれるより、其の方がよほど樂だから。然し何しろヴアイオレットの夫は氣品が上らないんだが、一體それはどうすればいい。

ヘクトル（頭を振りながら）いや、タナアさん、あなたの仰しやる樣に、そう安々と其人の行ひを許す譯には行かない。然しモウ何も云ひますまい。假令其人が誰であらうとも、ローブンスン嬢の夫には相違ない。私は兎にかく嬢の爲に其人の事を好く思つて置きたいのです。

オクテヴイアス（其の心中の悲みを察して）マローン君、お氣の毒です、實にお氣の毒です。

ヘクトル（有難がりて）ローブンスン君、君は實に好い人だ。どうも有難う。

タナア　外の事を話して居玉へ。ヴアイオレットが館から來るよ。

ヘクトル　此の機會に於いて、若し皆さんが暫く私に彼の方と二人きりで話す事をお許し下さいますと、私は非常に有難く存じますが。實は此の思ひ違を水に流したいと思ひます。それには少しお耳に入れにくい樣な——

ラムスデン（此場を逃れるを喜び）モウ宜しい、宜しい。タナア君、テヴイ、さあ來玉へ。（オクテヴイアスとタナアを連れて、自働車の側を通り、園の中

にブラ〳〵と歩み去る。)

ヴアイオレット、ヘクトルの側に歩み來る。

ヴアイオレット　誰も見てない？。

ヘクトル　見てない。

ヴアイオレット、ヘクトルに接吻する。

ヴアイオレット　あなた私の爲に嘘を吐いてたんですね。

ヘクトル　嘘！嘘どころなものか。それ以上の事をやつた。もう夢中になつて嘘八百を並べて了つた。ヴアイオレット、もう私に發表させて欲しいもんだなア。

ヴアイオレット(忽ち眞顏になつて斷然と)　いけませんよ、ヘクトル。

云はないと約束したぢやありませんか。

ヘクトル　そりやあなたが可いと云ふまでは約束は守るさ。けれど、あの人達に嘘を云つたり、自分の妻を認めなかつたりするのは實に厭だからなア。隨分卑劣な譯さ。

ヴアイオレット　あなたのお父さんがあんな分らずやでなければねえ。

ヘクトル　父は分らない譯でもないさ。彼方の立場から見れば、それが正當なのだから。父は元來英國の中等階級に對して偏見を持つて居るんです。

ヴアイオレット　それがおかしいぢやありませんか。ねえあなた、

私こんなこと云ふのは厭て仕樣がないけれど、私が若しか――モウよそう、何でも無いんですよ。

ヘクトル　いや分つてる。あなたが若しか英國の家具商人の息子と結婚したら、あなたの身内では屹度それを身分違と謂ふだらう。然るに世界第一の家具商人たる私の馬鹿親爺は、私が此の圓滿完全なる英國の貴婦人と結婚しようとすると、只其人に貴族の肩書が無いといふ丈の爲に、私を追出して了はうとする。勿論、それは無茶な話さ。然しねえヴアイオレット、私は父を欺くのは厭だ。私は丁度父の金を盗んでる樣な氣がする。なぜあなたは早く私に發表させて呉れないのだらう。

ヴアイオレット　そんな事が出來ますかよ。色戀の事なら幾らあなたがロマンチックな事を云つてもいゝけど、お金の事についてそんなロマンチックな事を云つちや仕樣がありませんよ。

ヘクトル（女房孝行の心と平生の道德呼はりの心との間に迷ひながら）それが即ち英國流だ。（衝動的に女に訴へる）然しヴアイオレット、何時かは親爺に見附けられるに極まつてるぢやないか。

ヴアイオレット　えゝ〳〵、そりやそうですとも、何れはねえ。だけどモウ會ふたんびに此話するのは止しませうよ。あなた約束したぢやありませんか。――

ヘクトル　宜しい、宜しい。私は――

ヴアイオレット（中々まだ默らうとせず）それに此の秘密の爲に苦むのは、あなたぢやなくて私なんですもの。それから苦勞をするたら、貧乏をするたら云ふ樣な話は、私初からイヤですわ。馬鹿々々しいんですもの。

ヘクトル　何もそんな事しなくてもいゝ。獨立の出來るまで親爺の金を借りて置いてさ、そしていよ〳〵發表する時には、それを償却して了ふんさ。

ヴアイオレット（驚き且つ下げすみて）あなた働くつもりなの？。あなたそんな事して此結婚を汚すつもりなの？。

ヘクトル　私は固より結婚の爲に自分の品性を汚さうとは思はないサ。先つきもあのタナア君が其事についてチョット私を冷かしたがね。——

ヴアイオレット　畜生！私はあのジャック、タナアは嫌ひさ。

ヘクトル（度量を示して）　ナニ、あれていゝさ。只少し善い女の愛を以てあの氣品を上げる必要があるのさ。それからタナア君がニスまで自働車旅行をやらうと云つてる。私もあなたを連れて行きたいんだが。

ヴアイオレット　好いわねえ！。

ヘクトル　だけど、どんな事にしたら可いだらう。彼人達は私に、あなたと一緒に行つちやイケナイと注意して呉れたんだ。そして內證

て、あなたは既に結婚してるんだと知らして呉れたんだ。こんな六かしい内證話を聞かされる光榮を有した事は生れて初めてだが。

（タナア、ストレカアと共に返り來る。ストレカアは車の方に行く。）

タナア　マローン君、君の車は大成功ですね。今、君の技手がラムスデン君に自慢して見せてる。

ヘクトル（熱心に、我を忘れて）　ぢや行つて見よう、ヴアイ……

ヴアイオレツト（目くばせをしながら、冷然として）　何か仰しやいましたか、マローンさん。私ッイ失禮致しましたが、――

ヘクトル（氣がついて）　いや何詰らない私のアメリカ式の自働車を見て戴きたいのですが。

ヴアイオレツト　有がたう、ぜひ拜見いたしませう。（二人、往來を彼方に去る。）

タナア　今度の旅行に就いてねえ、ストレカア。

ストレカア（車の方に一心になつて）　えゝ。

タナア　ホワイトフイルド嬢も僕と一緒に來る筈だがね。

ストレカア　だらうと思つてました。

タナア　ロビンソン君も連中なんだ。

ストレカア　えゝ。

タナア　そこでだ、君は途中で成るべく多く僕と一緒に居る樣にして、ロビンソン君を成るべく多くホワイトフイルド嬢と一緒に居る樣

に、旨くやつて呉れないか。そうすりやロビンソン君が非常に喜ぶから。

ストレカア（タナアの方に振向きながら）なアる程。

タナア　なアる程！。君のおぢいさんなら只默つて目禮をするところだ。

ストレカア　私の祖父なら帽子に手を當てゝ敬禮したでせうよ。

タナア　そして僕が其の丁寧慇懃なおぢいさんに一ソヴエレンもやるんだね。

ストレカア　なに、五シリング位なものでせうよ。（車を離れてタナアの側に來り）そしてお嬢さんの方のお考へは？。

タナア　ロビンソンがアンと二人て居たがるのと同じ樣に、アンもロビンソンと二人て居るのが好さ。（ストレカアは冷かな懐疑の眼を以て主人を見たが、やがて例の得意の歌を笛に吹きながら車の方に向ふ。）オイ、其の妙な騒々しい音を止めて呉れ。そりや君、何のつもりだね。（ストレカアは落ちつきはらつて其の歌を仕舞まで歌ふ。タナアはさすがにおとなしくそれを聞終りて後、又話しかける。今度はいよ〳〵本氣になつて居る。）エンリー、僕は勞働者の間に音樂を普及させる事は隨分熱心に唱道したもんだ。然し君が、ホワイトフイルド嬢の噂が出るたんびに直ぐにやりだす其の音樂には反對するよ。今朝もやつたね。

ストレカア（押しつけるように）　幾ら何としたつて駄目ですよ。ロ

ピンソンさんは早晩思ひ切らなきやならない時が來ますよ。

タナア　なぜ？。

ストレカア　およしなさいよ、分つてる癖に。尤も私の構つた事ぢやないが、何も私に對してそんなに空とぼけるにや及びますまい。

タナア　空とぼけやしないよ。僕にや全く分らないんだ。

ストレカア（笑ひながら意地惡げに）えゝソウてせうよ。そうてせうとも。私の構つた事ぢやない。

タナア（カゞょく）　エンリー、聞いてくれ。僕は平生から心掛けてる積りだ。君と僕とは雇主と技術者との關係だ。僕は常に君に對して相當の距離を保つて、僕の私事を以て君を煩はしてはならない。況んや我々の間の契約は君の勞働組合の承認をも經て居るんだ。然し其代り君の方でも其の便宜を濫用してはいかんよ。君も知つてるだらう、ヴオルテールの言葉に斯ういふ事がある。餘り馬鹿々々しくて話されない事も、歌には歌へる。

ストレカア　それはヴオルテールぢやありますまい。ボーマーシエイてせう。

タナア　ウ、其通り。ボーマルシエさ。所て君は斯うだらう。餘り入りくんてチョット話しにくい事も、口笛には吹ける、と斯う思つてるんだらう。然るに惜しいかな、君の口笛は、大變調子は善いけれど少しも意味が分らない。テエ君、今は誰も聞いて居ない。僕のお歴々の御

親戚達も、君のあの組合の幹事の奴も居ない。そこでね、エンリー、一つ男と男の差向ひて話してくれ。君はなぜロビンソンがホワイトフイルド嬢に對して駄目だと云ふんだ。

ストレカア　お嬢さんが他に誰かを追つかけてるからですよ。

タナア　馬鹿いへ！他に誰がある？。

ストレカア　あなたサ。

タナア　僕!!!

ストレカア　あなたそれを知らなかつたと謂ふんですか。人を馬鹿にするもんぢやありませんぜ。

タナア（眞劍になつて）　君は冗談を云つてるんか。それとも眞面目か。

ストレカア（驚となつて）　冗談ぢやありませんたら。（稍靜に）　あなたの顏の眞中に鼻の附いてるほど明かな事でさア。若しあなたが本當にそれを感づかないとすりや、まだあなたもウブのお坊つちやんだ。

（元の通り落ちついて）　然し御免なさいよ、タナアさん。男と男で話せと云ひなすつたから、遠慮なく男と男で話したんだけど。

タナア（狂氣の如く天に向つて訴へる）　それでは己が――己が蜂だ、己が蜘蛛だ、己が眼ざゝれた犧牲だ、己が狙はれた餌だ。

ストレカア　蜂だか蜘蛛だか知らないが、眼ざゝれた犧牲があなたてい事は間違つこなしだ。何しろお樂みなこッてさア。

タナア（サモ事々しく）　ストレカア君の本望を遂げる時が來たぞ。

ストレカア　何の事です。

タナア　あの巴里ビスクラ間のレコードねえ。

ストレカア（熱心に）　えゝ。

タナア　あのレコードを破れよ。

ストレカア（大得意になりて）　そりや本當ですか。

タナア　本當だ。

ストレカア　何時？。

タナア　今から。車の用意は出來てるか。

ストレカア（少し萎れて）　だつて眞逆——

タナア（ストレカアに構はず車に飛乘り）　サア行かう。先づ銀行に行つて金を取つて。それから僕の家に行つて僕の鞄を取つて。それから君の家に行つて君の鞄を取つて。それから倫敦ドーヴァ間、或は倫敦フォークストン間のレコードを破るんだ。それから海峽を渡つて、一氣呵成にマルセーユても、ジブラルタルても、ゼノアても、何處てもいゝからアフリカに渡る港に駈けつける。そうしてマホメット教國に踏みこめば、女を避ける事が出來るといふもんだ。

ストレカア　又そんな事て人を擔がうと思つて。

タナア（決然として）　ぢや、殘つて居玉へ。君が行かなきや僕獨りて行かア。（其儘車を動かしはじめる。）

ストレカア（追ひかけながら）モシ旦那！チョット待つた！待つた！。

（ストレカアがやつと車臺に攀ぢ登ると同時に、自働車が走り出す。）

第三幕

第三幕（梗概）

（一）

西班牙シイラ・ネヴアダ山に一群の山賊が居る。其の首領をマンドザと云ふ。彼等は山越の道路に釘を撒布して、それに依つて通行の自働車のタイヤにパンクチユアを起させ、其の乘客を脅迫して金を取る事を商賣にして居る。

タナアとストレカアの自働車が此ワナにかゝる。マンドザは傲然として、タナアに對し、『己は山賊だ。富者を掠奪して生活して居る者だ』といふ。タナアは早速それに答へて『我輩は紳士だ。貧者を掠

奪して生活して居る者だ。サ、握手しよう』といふ。こんな調子でタナアとマンドザとは譯もなく友人になり、火を焚いて物語に夜を更す。

『山賊は固より變則な商賣てす。所て、變則な商賣には二種の人物がやつて來る。一つは今の社會に役に立たぬ者、一つは今の社會に善過ぎる者。即ち我々は社會の澱と上汁とてす。澱は汚ないが、上汁は上等だ』などとマンドザは語る。マンドザはそれから猶自分の身上話をする。彼は曾て料理店のウエータアをして居たが、ルイザといふ女に戀をして遂げず、失望の餘り米國に行つて、そこて或男に勸められて、資本家の助を得て一つの會社を作り、今の此の商賣を始めたといふ。そして其ルイザといふ女は丁度ストレカアの妹てあつた。それからマンドザは頻りにルイザを戀ふる歌を歌ひだす。タナアもストレカアも其まゝそこに寢て了ふ。

（二）

舞臺はこゝて一時暗闇になる。今度あかりがさすと、十五六世紀の西班牙の貴族の姿が現はれる。それは即ちドン・ホワン・テノリオてある。そして其の恰好なり顏立なり、丁度ジョン・タナアの様に見える。

（ドン・ホワン・テノリオは十四世紀の人物て、西班牙セヴイルの名家の子てあつたが、提督ウルヨアの娘アナを誘惑したる後、遂に提督を殺した。其後敎會の僧侶等はドン・ホワンの亂行を憎み、彼を修道院に招いて殺して了つた。然し世間に對しては、其の修道院に立てられてあつ

た提督の像が怒を發して、ドン・ホワンを地獄に引きずつて行つたと言ふ事になつて居た。此話が西班牙、伊太利あたりで先づ色々と芝居に仕組まれ、後ち佛蘭西、英吉利、獨逸にも及んで行つた。それてドン・ホワン(英語てはドン・ジュアン)と云へば、放縱無賴なる無信仰の人といふ意味になつて居る。)(著者序文抄譯參照)

次に一人の老婆の姿が現はれる。恐ろしい寂しい處に來たが、こゝは何處だと聞く。ドン・ホワンが、こゝは地獄だと答へるのて、老婆は大いに驚く。自分は生前に義務を盡し、名譽を保つて來た者てあるのに、どうして地獄に來ただらうと怪む。然るにドン・ホワンは、いや〳〵地獄は名譽と義務と正義と、其他あらゆる美德の住處てある。地上に於ける一切の惡事はそれら美德の名に依つて行はれる。だから其の報(むくい)は矢張り地獄の外はないといふ。それから猶ドン・ホワンが、地獄の生活には肉體もなく、年齡もないから、あなたのお望みの年齡容貌て暮す事が出來るといふのて、老婆は廿七歳になりたいと云ふ。すると忽ちにして老婆は若い美しい女になる。そしてアン・ホワイトフイルドと見違へる樣な顏容(かほかたち)になる。是が即ちウルヨアの娘ドナ・アナてある。

是て兩人互に驚く事などあつて後、そこに白い大理石の像が一つ現はれて來る。それが即ちアナの父ウルヨアてある。ウルヨアの聲はローバック・ラムスデン其まゝに聞える。ウルヨアは石像になつてから一層世人に敬愛せられたのて、それて今は其姿て暮して居るとの事。

それから今度はそこに地獄の魔王が出て來る。アナが驚くと、ドン・ホワンは、ナニ魔王といふ者は世間ていふほど怖いものではないといふ。魔王はメフイストの樣な姿をして居るが、どうやらマンドザにも似て居る。

（三）

是より四人の間に地獄と天國との事について種々樣々の問答がある。ウルヨアの石像は生前僞善者であつたのだから、天國にやられたのは當然であるが、然し天國は迚も退屈でやりきれないから、今地獄に移住して來たのだと云つて居る。ドン・ホワンは生の力と宇宙の目的とを說いて、是非これから天國に行くのだと云つて居る。アナも只無暗に天國に行きたがつて居る。魔王は死の力と破壞の力とを說き、兎にかく自分の方が多數だから結局は勝だと威張つて居る。

ドン・ホワン曰く『地獄は幻しの國である、幸福追求者の住處である。現實界の主人の住處たる天國と、現實界の奴隸の住處たる地上と、此の兩者から逃れて行く處が即ち地獄である。地上は人間男女が英雄や、神人や、聖者の飯事をする處であるが、然し彼等はいつも肉體の爲に其の極樂から引ずりおろされて了ふ。要するに、饑渴、寒暑、老、病、死、等が人間を現實の奴隸にして了ふ。然るに此の地獄に來れば、最早そんな肉の壓制が無くなる。こゝでは人はモウ動物でなく、只靈魂となり、假空となり、幻想となり、無死、無齡、無體の者となる。そこで如何に美を說き、

愛を語り、義烈を唱ふるも、決してそれに矛盾する樣な冷酷の事實がない。

『天國に於いては之に異なり、遊び事をしたり、體裁を作つたりするのでなく、一切の事物其儘に面と向ひあふのである。我輩は此の沼々たる虚僞より逃れ、俗惡なる幸福の追求より逃れ、而して未來永刧思索に耽らんが爲に、是より天國に行かんとするのである。』

『それぢや天國では、思索より外に仕事は無いか』とアナが聞いたので、ドン・ホワン又曰く『イヤ、生の力の向上を助けるといふ仕事がある。生の力は元來盲目で、恐ろしい浪費をしたり、自らを破壞したりして來た。之を其目的に向つて進ましめる者は腦髓である。人間は臆病者である。然し宇宙の目的の爲に鬪つて居るのだと思へば、其時はじめて恐怖が無くなる。各人は皆人類完成の爲に死ぬると云ふ事になるのである。』

此の目的といふ事からして、ドン・ホワンの男女論が出て來る。『女に取つては、男は只子を作り、子を育てる爲の道具である。性の上より云へば、女は、自然が其の最大の功業を繼續せんが爲に拵へた器械である。そして男は、此の自然の命令を最も經濟的に實行せんが爲に、女の拵へた器械である。女は其の大昔の進化の過程に於いて、單性生殖よりも一層良好の結果を來さんが爲に、男性といふ者を發明し、分化し、創造した事を、本能的に知つて居る。然し男はそれ丈の職分を盡して、猶餘力

がある。それが腦髓と筋肉とに行つた。そして女に相談なしで文明を作り出だした。是は男の方から見れば、單に女の目的を達する道具たるより以上の、何者かにならうとした企てゞある。』

ドン・ホワンは猶論じて曰く『一體、生の力は自己を立する爲に無數の實驗をやつた。マンモス象を作り、人間を作り、二十日鼠を作り、メガセリウムを作り、蠅を作り、蚤を作つたが、生の目的は美と云ふ樣な事にはなかつた。若し美が目的であるならば、鳥類は人間よりも遙かに美である。生の目的は正に腦髓にある。腦髓は生が自意識を生じ、自己理解に達するの器官である。丁度、幾世代の苦鬪の結果として、眼といふ驚くべき器官が發達したと同じ樣に、今は生の目的を見るべき心眼が發達しかけて居るのである。今日迄の所でも、哲人なる者は常に世の尊敬を受けて來た。哲人は思索に依つて世界意志を發見し、又其の意志遂行の手段を發見し、又其の手段に依つて其の意志を成就する者である。此種の人物の外は、我等はモウ飽きはてゝ了つた。

『我輩が地上に居た時、醫學者も、神學者も、政治家も、皆我輩と分れて了つた。只藝術家とは數年の間相親しんで、少からぬ利益も得たが、然しそれが例の婦人崇拜に歸するに及んで、僕は又それと分れた。美を崇拜し、幸福を追求し、婦人を理想化するが如きは、生の哲學の爲に何の役に立つものでもない。

『然しながら、我輩は猶其の婦人から學ぶ所があつた。我輩が婦人に

對する時、我が腦髓は否と云ひ、我が道德は否と云ひ、我が良心は否と云ふに係はらず、猶生の力は我輩を捕へて彼女の腕に投じた。我輩は正に生の力の不可抗力なるを悟つた。

『生の力が結婚を尊敬するのは、結婚が最大多數の子供を作るべき方法であるからである。名譽の、節操の、道德のといふが如きは、生の力の意に介する所ではない。結婚は人間制度中の最も淫逸なる者である。そこが結婚の世に持てはやされる所以である。結婚は即ち溫良貞淑の見かけを餌にして男を釣るワナである。

『兩性關係に於ては、宇宙の創造力は男女個々の事情なんどを無視して了ふ。茲に一對の男女があつて、それが全然相識らざる間柄であらうとも、或は言語を異にし、人種を異にし、年齢を異にし、性質を異にする者であらうとも、生の力は猶それを驅つて一瞥の下に互に相擁せしめるのである。親々の協議に依り、本人同志は何も知らずに、結婚の取結ばれるといふ習慣も、之に依つて說明が出來るでは無いか。軍人が敵を殺す時、何も個人的に怨がある譯ではない。それと同じく、女が國の爲に盡す時、何も必ずしも個人的に其男を愛せねばならぬ譯はない。要するに兩性關係は個人關係に超越したものである。』

ドン・ホワンは更に一轉して自己に就いて語つて曰く『我輩は、自己より以上の者を考へ得る時に、それの實現の爲に勉め、或は其の爲に道途を淸むる事をせずには居られぬ。それが我輩の生の法則である。

それが即ち生が我輩の心中に働いて、より高き、より深き、より廣き、より強き自意識に達し、又より明かなる自己理解に達せんとする努力である。

『我輩の指が我輩の一部分であると同じく、我輩は亦實に自然界の一部分である。そして我輩の指が我輩の物を攫む器官であると同じく、我輩の腦髓は亦實に自然界が自ら理解せんとする器官である。故に哲學者は此の力に捕へられて居る者である。生の力は哲學者に告げて云ふ。我は從來無意識の間に無數の事をして來たが、今後は自己を知り、目的を知り、道を擇んで進みたいと思ふ。そこで我は一種特殊の腦髓、即ち哲學者の腦髓を作つた。哲學者よ、我が爲に之を勉めよやと。されば哲學者は自然界の水先案内である。地獄に在る者は只波に任せて漂ふが如し。天に上る者は自ら梶を取るが如し。』

斯くてドン・ホワンはいよ〳〵天に上らんと欲して、石像に其道を問ふ。石像は答へて、天國と地獄との境目は、只事物の見方の差である。眞實そこに行きたいと思ふならば、どの道からでも直ぐに行かれる、と教へる。そこでドン・ホワンは一禮して行きかゝる。するとアナは、私も一緒に行きたいと云ふ。然しドン・ホワンは、自分の天に上る道は分るが、人の天に上る道を見つける事は出來ぬ、と云つて消失せて了ふ。

（四）

後に魔王は稍嘆息して石像に向ひ、『どうも、あゝいふ生命崇拜者連

は皆んな行つて了ふ。奴等にはどこか不自然な所がある。奴等の說法は實に危險です。あの超人間の追求に御注意なさい。あの思想はツマリ人間全體を輕蔑する事になる』といふ。すると石像は『其の超人とは何だ』と問ふ。『イヤ、それは生命崇拜連の近頃の流行で、あの獨逸の氣違の、えゝ何とか云つた、おゝ、あのニイチエに天國で會ひませんでしたか』と魔王はいふ。『そんな者は一向聞いた事もない』と石像はいふ。『其ニイチエが大の生命崇拜家で、それが超人を擔ぎはじめたものです。彼も初はこゝに來て居たが、こゝでワグネルと喧嘩をして、とう〳〵天に上つて了つた。然しそれも結句厄介拂てあつた。サア是から私の宮殿に行つて、あなたの御來降の祝賀會を催しませう』

と、それで二人は消え失せる。

アナはそれを呼びとめて、『超人は何處に居る』と問ふ。『超人はまだ創造されて居ない』と魔王は答へる。『恐らく永久に造られまい』と石像は答へる。

後にアナは『まだ造られて居ない！。それではまだ私の仕事がある。私は將來の生を信ずる。あゝ父よ、超人の父よ！』と叫ぶ。

（五）

是にてアナが消えうせると、再び舞臺は眞暗になり、更に漸く光がさして、『自働車！自働車！』といふ聲が聞える。新しい自働車が又一臺來たのである。タナアとマンドザとストレカアが眼を覺す。

山賊の手下共は、『今度の車には男が三人と女が二人乘つて居る。そして別の車に兵隊が乘つて供をして居る』と報告する。タナアは『ハヽア、それは供ぢやない。君等を逮捕に來たんだ。昨日我輩にも、それを待つて一緒に行けといふ注意があつたけれど、我輩は急いて居たもんだから』といふ。サア大變といふのて皆々騒ぎだす。

マンドザはそれを制してタナアに向ひ、『あなたは私を敵に渡しはしますまいね。昨夜は貧者の掠奪者が富者の掠奪者の手の中に在つた。そしてあなたは私と握手した。』『宜しい、我輩は何も君の罪を問ふ事はない。我輩は只樂しくこゝて一夜を過した丈の事だ』とタナアは答へる。

そこにアンと、ヴアイオレットと、ヘクトルとが、自働車から降りてやつて來る。『おゝジャックが』と先づアンが叫ぶ。『まあ好かつた。然しバンクチユアをやりましたよ。道は丸て釘だらけだもの』とヘクトルは云ふ。『あなた此處てこんな人達と何して居たの』とヴアイオレットはいぶかる。『あなたナゼ默つて逃げだしたの』とアンは攻めかける。『君の跡を追つかけるのに、ホワイトフィルド嬢は丸て探偵の樣に機敏てしたよ』とヘクトルは云ふ。『生の力だ！。僕はモウ駄目だ』とタナアは嘆息する。『まあ好かつたねえ君、僕は君が屹度山賊につかまつたと思つたよ』と、後れて來たオクテヴイアスは云ふ。マンドザは昔しホテルて此人達を皆知つて居る。

兎かくする中、兵隊がやつて來て、山賊共を不審げに見やつたが、『是は私の從者です』とタナアが云つたので無事に濟む。

第四幕

第四幕

西班牙グラナダの貸別莊の庭。それがどんな風の者かといふ事を知りたい人は、グラナダに行つて見て來るより外はない。若し只平凡に其の風景の特點を擧げるならば、先づ貸別莊で點綴せられた丘陵の一群があつて、其の丘陵の一つの頂きにアルハムブラ城があつて、谷あひには可なり賑かな町があつて、それに通ずる埃だらけの白い道があつて、其道には乞食の子が大勢居て、實際は何を仕て居ようと、何を考へて居ようと、口先では絶えず自働器械の樣に、一錢やつて御呉んなさいと泣聲を出しながら、今にも攫みつきそうな、小い茶色の手の掌(ひら)を通行人の前に差出す。然しそう云つたばかりでは、アルハムブラ城と乞食と道の色とを除いて、其他は何もスペインに限る事はなく、英吉利のサアレーの景色も全じ事である。然るにサアレーの丘は比較的に小くて汚なくて、寧ろサアレーのデコボコとでも云ふべ

き者であるが、今このスペインの丘陵はやゝ山岳の趣きを帶びて、其の大きさは風光の爲めに隱されて居るが、而も其の威嚴は少しも損ぜられて居らぬ。

前記の庭はアルハムブラ城と相對する一つの丘陵の上にある。別莊は苟くも富裕な英米の遊覽者に、家具附一週間極で貸さうといふには、是非かうなくてはと思はれるほど、贅澤に見えばつて拵へてある。今此の庭の欝の芝原に立つて上の方に向くと、無限の空間を限る丘の頂上に作られた石だゝみの物見臺の石造の欄干が、我等の眼界線を爲して居る。此の物見臺と芝原との間に花園がある。花園の中には丸い池があつて、其の中央には噴水がある。そして池のまはりは幾何學的の花壇と、小砂利の道と、摘込の水松とで、さもキチンとみやびやかに取り圍まれて居る。此の花園は芝原よりも一段高いので、其の土手の中程にある二三段の雁木を登つて行く事になつて居る。物見臺は花園よりも又一段高いので、そこは又二三間の雁木を登つて行く事になつて居る。そして欄干から見渡すと、目の下の谷あひの町から、彼方に連なる幾多の丘陵から、果は遙かに霞む遠山の姿まで、誠に眺望絶佳である。別莊は左手にあつて、花園の左の隅から雁木を登つて行く事になつて居る。扨、物見臺から花園を通つて(別莊を右手の方に後ろにして)再び元の芝原に降りて來ると、こゝには今テニスの網も張つてなく、クロケーの金輪も見えず、只左手に戸外用の小い鐵製のテーブルがあつて、其上に幾册かの本(多くは黃色表紙の)があつて、そして其側に椅子が一つ置いてある處は、此の別莊の借手が學問の趣味を持つて居る事を示して居る。又右手の椅子の上にも開けたまゝの本が二三册置いてある。そして新聞紙といふ者は一枚もない。此の事實と彼の勝負事の遊戯の無い事とを思ひ合せると、此の別莊に住む人達の人品が、少しく心ある人の眼には、十分ハツキリと見えて來る筈である。然しモウそんな推量はこゝで妨げられる。今此の心地よき午後の日影に、左手の櫛ひの小門から、ヘンリー・ストレカア

が運轉手の服裝で現はれて來る。彼は門をあけて一人の老紳士を内に入れ、自分は其後について芝原の上に來る。

此の老紳士は南國スペインの太陽を事ともせず、黑のフロックコートを着て、高いシルクハットを冠つて居る。ズボンは鼠色と藤色の目せぎの立縞で、誠に上品な色合を織り出して居る。そして黑のネクタイは純白なりンネルの上に蝶形に結ばれて居る。之に依つて見ると、此の紳士は、氣候風土の如何に係はらず、絶えず用心して其の品格を保たねばならぬ人であるらしい。即ちサハラの砂漠の眞中に於いても、アルプスの白山の絶頂に於いても、同じく此の通りの服裝をする人であるらしい。然るに彼れの風采には、第一流の裁縫店と雜貨店を廣告してやり、且つそれを立行かせる事を以て自己の天職と心得る、貴族階級の氣位が缺けて居るので、盛裝すると却つて人間が野鄙に見える。尤も其代り、どんなのでも勞働服さへ着てゐれば、ズット引立つて威嚴が備はつて來る。頰は圓くふくらんで、顏色は赤く、髮は硬く、眼は稍小く、口は兩端が少し下がつてキュッと引締り、顎は意地惡げに突出て居る。さすがに年のセイで、喉の邊と頰の垂とには皮膚の緩みがやつて來て居るが、それでも口より上の方はまだ林檎のように緊く締つて、結局、顏の上半部は下半部よりも若く見えて居る。彼は如何にも金を儲けだした人といふ自重の風を示して居る。而も其の金儲けが隨分ひどい殘忍な遣方であつたといふ趣きを何處やらに示して居る。從つて彼がおとなしくして居る時でも、其底には、必要次第、他の手段を取るの覺悟があるぞといふ威嚇の態度が、殆んどあり〳〵と見えて居る。然るに恐を抱くべき理由なくして彼に對すれば、彼は寧ろ憐むべき男である。此の恐ろしき商業界の大カラクリが遂に彼を今のフロックコート委に仕上げたものゝ、其間中々樂な月日はなくて、彼れの情は常に荒らされ餓やされて居た。斯くて彼は折々どこやら物悲しげな樣子を見せる事がある。彼れの言葉を一言聞くと、直ぐに愛蘭土人といふ事が明かに知れる。居處なり身分なり

の幾變遷に係らず、其の國音は何處までも彼に附きまとつてゐるのである。恐らく彼れの本來の言葉は、あの荒つぽいケリー訛であつたらうと察せられるが、然し倫敦、グラスゴウ、ダブリン、其他一般大都會に生じた言葉使の墮落の間に、モウ久しいこと揉まれて來たので、今ではモウ生粹の倫敦子にあらざる限り、それを訛なんぞと思ふ者は決してない。其の言葉の重くるしさこそはまだ少し耳に障るが、其の音調はモウ殆んど無くなつて居る。ストレカアは固より倫敦子であるので、自分の國語も滿足には話せない間拔として、痛切なる輕侮を以て彼に對して居る。然し又一方には、ストレカアは、此の老人のアクセントを以て、全く神が英國人を樂ましめんが爲に、態と拵へてくれた戲れだと思つて居るので、總て不幸なる劣等人種に對する寛大親切の意味を以て彼を遇して居る。然し老紳士が調子に乘つて其の間拔な愛蘭土流を押し通さうとする日になると、ストレカアは急にムツとして之に臨む事がある。

ストレカア　ちよいとお嬢さんにお知らせして參りませう。こゝにお待ち下さる方が御都合がお宜しからうといふお話でしたから。

（と別莊の方に向つて花園に登りかゝる。）

愛蘭土人（物珍らしげにあたりを見廻して居たが）　お嬢さん？といふのは其のヴアイオレット嬢の事だな？。

ストレカア（急に疑念を起して厩木の上に立止り）　そうですとも、あなた御存知ないんですか。

愛蘭土人　私がかい？。

ストレカア（少し癇にさへて）　ぢや一體、あなた御存知なんですか、御存知ないんですか。

愛蘭土人　それを聞いてお前が何にする？。

ストレカアはもう堪りかねて艦木より後戻り、客人の前に突立つ。

ストレカア　私がそれを聞く譯を話しませう。一體ロビンソン嬢は――

愛蘭土人（それを遮りて）　ウン、苗字はロビンソンだな。おかげて分つた。

ストレカア　えゝ？、苗字さへも知らないんですか。

愛蘭土人　知つてるよ、今聞いたから。

ストレカア（老人の此の平氣な即答にチョットまごついた後）　マアお聞きなさい。あなたがあの手紙の宛名の人て無いとすりや、どうして又私の車に乘つかつてノコ〳〵こゝまてやつて來たんてす？。

愛蘭土人　それぢや一體あの手紙は誰に持つて行つたんだい。えゝ？。

ストレカア　エクトル・マローンさんに持つて行つたんてさア、ロビンソン嬢に頼まれて。私はロビンソン嬢の雇人ぢや無いんだけれど、頼まれたから行つたんてす。マローン氏は私も知つてるが、あなたは違ひまさア、丸ッきり違ひまさア。あのホテルて店の者があなたの事をエクトル・マローンと云ふもんだから――

マローン　ヘクトル・マローン。

ストレカア（上手に出て）　あなたの國てはヘクトルてせうが、それは

愛蘭土とかアメリカとかいふ田舎者の云ふ事です。こゝぢやモウあなたはエクトルです。あなたはまだ氣がお付きにならんか知れないが、今に分りますよ。（註。スペイン、フランスあたりでは、へをエと發音す。ストレカアの樣な倫敦子も同じくへをエと發音す。）

此の會話の形勢不穩の成行も、幸ひヴアイオレットが來たので救濟される。ヴアイオレットはツカ〳〵と別莊より出て來り、花園の中を通つて厩木を降り、丁度折よくマローンとストレカアの間に來る。

ヴアイオレット（ストレカアに向ひ）　あの手紙を持つて行つて下すつて？。

ストレカア　えゝ、ホテルに持つて行きまして、取次を賴みまして、若い方のマローンさんが見える事と思つて居ましたが、此の方が出てお

いてになつて、宜しい己が行くからと仰しやるんです。そして店の者が、此の方がエクトル・マローンさんだと云ふもんですから、それでお連れ申したんです。そして此の方は今も矢張り其の御當人だと仰しやるんです。然しお嬢さん、若し人違ひならそう云つて下さい。譯アありません、直ぐに此人を連れ戻しますから。

マローン　エー、ちよいと暫くの間あなたとお話を願へますと、私は大變に仕合せますが。實は私はヘクトルの父で御座います。此の利口な英吉利ッ子も、もう一時間ばかりも經つたら大がいそれと氣付く所でしたらうが。

ストレカア（冷かに其の言葉を撥ねつけ）　どうして、一時間くらゐ經つ

たつて駄目だ。あなたが息子さん程永くこちらに居て研きを掛けたら、少しは息子さんと似つく様になるかも知れないが、今ぢやまだ〳〵ズウツト格が落ちまさア。H を(への字を)使ひすぎるだけても駄目てさア。(ヴアイオレツトに向ひ、愛想よく)ては、お嬢さんは此の方とお話になるんでせう。私はお邪魔になりませうから。(機嫌よくマローンに一禮して、帶ひの小門より出て去る。)

ヴアイオレツト(頗る丁寧に)御免下さいましよ、マローンさん。あの男はどうも亂暴て困りますが、あれは私共のショーフアて、どうも致方が御座いません。

マローン　エ、何、ショーフア?。

ヴアイオレツト　えゝ、自働車の運轉手て御座いますの。あの男は一時間七十マイルの速力で運轉させますし、それに破損すれば直ぐに修繕も致します。私共は自働車が無くちや困りますし、自働車はあの男がなくちや動きませんので、つまり私共はあの男にたよらなくちや仕様がないので御坐います。

マローン　成程、私もそう思つて居ましたよ。英國人は金の千兩も儲けると、其の度毎に自分のたよる人の數を一人づゝ增すのですね。然しあの男の事は御詫なさるには及びません。私は態とあの男に喋らせて、あなたが英國人のお連と一緒に、私の息子のヘクトルも仲間に入れて、此グラナダに御滯在中といふ事を知りましたよ。

ヴアイオレット（打解けた言葉附にて）えゝそうなんですよ。私共は初め佛蘭西のニスに參る積りでしたけれど、運の中に一人調子はづれの妙な人がありましてね、それが拔駈をしてこゝにやつて參つたものですから、それで據どころなく私共も其跡を追うて參りましたの。マアお掛けなさいませんか。（と、側の椅子の上の二冊の本を取りのける。）

マローン（其の取持振に感じて）どうも有がたう。（と椅子にかける、鐵のテーブルに本を置きに行くヴアイオレットを珍らしげに檢分しながら。そしてヴアイオレットがこちらに向いた時）あなたがロビンソン嬢で入らつしやいませうね。

ヴアイオレット（掛けながら）左樣で御座います。

マローン（匿より一通の手紙を取出しながら）あなたがヘクトルにお遣はしになつたお手紙には斯う書いてありますな。（ヴアイオレットは覺えずギョットする。マローンは悠々閑々と金緣の眼鏡を取出して掛ける。）『最愛の君よ。今日の午後は、皆がアルハムブラ城に行つてます。私は頭痛の假病を使つて、只つた一人で此園に居ます。ボイと此の自働車にお乘んなさい。そうすりやストレカアが瞬く中にあなたをこゝに連れて來ます。早く、早く、早く。愛するヴアイオレットより。』（マローンはヴアイオレットの顏を見る。然しヴアイオレットも今はもう氣を取り直して落ちつきはらつてマローンの眼鏡を見返す。マローンは緩かに言葉を續ける。）英國の交際社會ぢやア、若い人達がどんな風につきあふもの

か私は知りませんがな、若し是がアメリカだつたら、此手紙の文面ぢや、二人の間にモウ餘ほど親密な交りがあるものと見られますがな。

ヴアイオレツト　そうですとも。私、あなたの御子息のマローンさんと隨分御懇意にして居ますわ。それに何ぞ御異存がおありですか。

マローン（少々避易して）　いえ何、異存といふほどの事はありませんがな。只、私の息子はまだ全然私に掛つて居る身の上ですからな、何事に依らず少し重大な件を處理しようとするにや、一々私に相談しなけりやなりません。それさへ分つて居れば可いのですが。

ヴアイオレツト　それにしてもマローンさん、何もあなたが無理な事を仰しやるのぢや御座いますまい。

マローン　そりあ勿論てさア。だけどねえ、あなた方のお年頃では、私に少つとも無理と思はれない事でも、隨分無理とお考へになりそうですからな。

ヴアイオレツト（少し肩をゆすぶつて）　マローンさん、モウお互に探りを入れる樣な事を云ふのは止しませう。ヘクトルは私と結婚したいのです。

マローン　あの御手紙を見てそんな事だらうと思ひましたよ。勿論そりやヘクトルは何を仕ようと勝手ですがな、然しあなたと結婚するんぢや私は一文も出しやしません。（眼鏡をはづして手紙と一しよに匿に入れる。）

ヴアイオレット（少しキットなって）　マローンさん、隨分な御言葉て御座いますねえ。

マローン　いやお孃さん、何もあなたに對してドウコウ申すのぢやありませんよ。あなたは固よりおしとやかな立派なお孃さんです。只私はヘクトルの爲に少し別の考へを持つて居るのです。

ヴアイオレット　でもヘクトルは自分の爲にそんな別の考へなんぞ持つて居ないでせう。

マローン　そうかも知れません。それなら私に關係なく勝手に獨てやる丈の事てす。あなただつて固より其の御覺悟があるのてせう。あなたの樣な若い娘さんが、若い男に對して、早く、早く、早くなんて呼出しの手紙を書く場合にや、金の事なんぞどうてもいゝ、何よりかより戀が大事だといふんてせう。

ヴアイオレット（頗る銳く）　マローンさん、それは違ひます。私はそんな馬鹿な事は考へません。ヘクトルにはお金が入用てす。

マローン（たじろきて）　いや御尤も、それは御尤もてす。然しヘクトルが働いて儲けるてせう。

ヴアイオレット　働く程ならお金なんぞ入りやしません。（ムシャクシヤして立ち上る。）あなたも餘んまり分らないぢやありませんか。御自分の子供に體面を保たせるのは當前ぢやありませんか。それはヘクトルの權利て御座います。

マローン（六かしい顔で）　ロビンソン嬢、其の權利を當にしてヘクトルと結婚するのはお止しなすつた方がいゝてせう。

ヴアイオレットは最早殆んど我慢がしきれなくなつたが、勉めて穏かにそれを抑へ、握つて居た拳を解き、慧と冷靜沈着を裝うて席に着く。

ヴアイオレット　一體あなたは、私についてどういふ御異存があるのです。私の社會上の地位は少くともヘクトルと同樣です。ヘクトルもそう云つて居ります。

マローン（拔目なく）　恐らくあなたは、しよつちうヘクトルにそう云つてお居てなのでせうが、ねえお嬢さん、ヘクトルの英國に於ける社會上の地位は、ツマリ私が買ひよう一つにあるんです。私は彼に斯ういふ旨い提案をしたんです。英國中で一番古い由緒のある、邸なり、城なり、御殿（註。昔の伽藍の、今は個人の住宅となれるもの）なりを見つけだせ。そして其の由緒相當な妻の爲にそれが欲しいといふのなら、私は直ぐにそれを買つてやる。そしてそれ相當の暮しの費用を出してやる。

ヴアイオレット　其の由緒相當の妻と仰しやるのは、一體どういふ意味で御座いますか。然るべき敎育を受けた婦人なら、誰にだつてそんな家くらゐ持つて行けるてはありませんか。

マローン　いけません。由緒ある家に生れた者てなくちや駄目です。

ヴアイオレット　ヘクトルだつて生れついたのぢやありますまい。

マローン　ヘクトルの祖母は裸足で歩いた愛蘭土の娘で、ガラ炭の火で私を育てたもんです。若しヘクトルが又ぞうろうそんな女と結婚するんなら、私は決して婚資金など出しやしない。若し又ヘクトルが私の金の力で以てズット自分の身分を上げるとか、但しは誰か他人の身分を上げるとか、兎にかくどこかで身分の上に儲を見るんなら、そうすりや私が金を出す道理も立つと云ふもんだ。兎にかく誰かゞ其金の爲に儲けをしなくちや駄目です。彼があなたと結婚したつて今の儘と少しも違ひはありやしませんや。

ヴアイオレット　マローンさん、私の親戚の中には、私が身分のない女の孫に當る人と結婚すると云へば、隨分反對する者も澤山あります。

勿論それは偏見といふものですが、然しあなたが是非ともヘクトルを貴族と結婚させようとなさるのも、矢張り頑固といふものです。

マローン（立上りてヴアイオレットに近よる、不本意ながら餘ほど尊敬の念を起して、ツク〳〵と打見やりながら。）あなたは大分テキパキと率直に云つてのける御婦人ですね。

ヴアイオレット　私があなたに儲けをさせないからと云つてそれが爲に私を貧乏にしなくちやならないといふ道理がどこにあります。何であなたはそんなにヘクトルを不幸に陷しいれたいのでせう。

マローン　何アに、直ぐに治つて了ひますよ。金の失望よりも戀の失望の方が餘ほど樂です。斯う云ふとあなたは定めし下劣な言事だ

とお思ひてせうが、そんな事は私がよく知つて居る。私の親爺は四十七年の麥の黑穗病の時に愛蘭土で餓死をしたんです。其話はあなたもお聞きになつた事がありませう。

ヴアイオレット　饑饉の事ですか。

マローン（燃えのこりの感慨を起して）饑饉ではなくて餓死です。食物は國中に有り餘つて外國に輸出するといふ時に、饑饉のある筈はありませんや。私の親爺は餓ゑて死んだんです。そして私はお袋に抱かれて餓ゑながらアメリカに行つたんです。英國の政治が私と私の一家族を愛蘭土から追出したんです。それで英國人は今愛蘭土を取つて居るが、私等の仲間は斯うして又外國から戻つて來て英國を買ふんです。英國の一番上等の所を買ふんです。中等社會の家屋敷や、中等社會の女は、私がヘクトルの爲に望む所ぢやないんです。どうです、是ならあなたと御同樣、隨分率直な言方でせうがね。

ヴアイオレット（氷の如く冷かに彼れの感慨を憫笑して）まあ驚きますねえ。あなた程の御年配で、而もあなた程の思慮のあるお方が、そんな夢の樣な事を仰しやるとは。あなたは英國の貴族が、お望みどほり其の邸を賣るものだとお考へですか。

マローン　私は今、英國で一番古い家柄の邸を二つ、賣込の相談を受けて居ます。一つは其の舊家の主人が、室の掃除でやりきれないと云ふんです。それから今一つは、相續稅の工面が付かないと云ふんです。

どうですな、斯う云ふのは。

ヴァイオレット　それは無論失體ですわ。けどもあなた御存知でせう。相續税なんといふそんな社會主義的な事は、いづれ政府が止めて了ふでせう。

マローン（嘲笑ひながら）　私が其の邸――邸といふよりか二つとも寧ろ御殿だが――其の御殿を買取る前に、そんな事が政府に出來るとあなたは思ひますかね。

ヴァイオレット（少しヂレ氣味にて其話を止めて了ひ）　マローンさんモウそんな詰らない話よしませう。あなただつて今まで話したことなど馬鹿々々しいとお思ひでせう。

マローン　私やそうも思ひません。私や今云つた通りに考へてるんだから。

ヴァイオレット　それぢや、あなたまだ私ほどヘクトルを御存知ないのです。ヘクトルはロマンチックで、氣まぐれで、――それは多分あなたから傳はつたのでせうが――ですから誰か好く世話をして呉れるような奥さんを欲しがつて居るのです。そんな氣まぐれでない好い人をねえ。

マローン　丁度あなたの様な人をと云ふんですか。

ヴァイオレット（落ちついて）　えゝ、そうですの。ですけれどあなた、ヘクトルの地位を保つ丈の十分の資産が無くつて、それで私にそんな

ことしろと仰しやるのは無理ですわ。

マローン（驚いて）まあチョット待つて下さい。そりや一體どういふ事になるんです。私や何んにもあなたに頼んでる積りぢやありませんが。

ヴアイオレット　勿論です、マローンさん。あなたの樣に態と私を曲解なすつちや、お話が仕にくゝなつて仕樣がありません。

マローン（半ば當惑の體にて）私や何も無理にあなたをイヂめてる積りぢや無いが、何しろ是や大分話が横道にそれて來た樣ですね。

ストレカア、大急ぎの體で小門を開き、ヘクトルを内に入れる。ヘクトルは怒氣忿々として芝原の上に來り、父に向つて喰つて掛らうとする。ヴアイオレットは大きにまごつき、飛び上つてヘクトルを押し隔てる。ストレカアは其まゝ行つて了ふ。兎にかく聽力の及ぶ處には居ない。

ヴアイオレット　マア惡い處に來たわねえ、あなた。後生だから何んにも云はないで頂戴。そして私がお父さんとお話の濟むまで、あちらに行つてゝ下さいな。

ヘクトル（頑として）いゝやイケナイ。私は明瞭に此の事件を解決しなくちやならない。（と、ヴアイオレットを傍へに押しのけて、父の面前に進み出る。マローンは愛蘭土の血が湧き立つて來て、頰の色を薄黑く染めだす。）お父さん、あなたは隨分ひどい事をしましたね。

マローン　それは何の事だい。

ヘクトル　あなたは私宛の書狀を開封した。そして私に成り變つて拔駈に此の御婦人を訪問した。實に怪しからん事です。

マローン（感しつける樣に）　ヘクトル、氣を付けろ。お前は今何を云つてる。よく考へて見ろ！。

ヘクトル　考へたんです。今も考へてるんです。私は英國の社交界に於ける、私の名譽と地位とに就いて考へてるんです。

マローン（稍激して）　お前の地位は己の金で買つたんだぜ。忘れたかい。

ヘクトル　所が、あなたは今あの手紙を開封して、それで私の地位をスッカリ叩き壞して了つた。私の父たる者が、英國の貴婦人から來た他人宛の手紙、而も親展の手紙、大事の手紙、秘密の手紙を開封したと云ふのです！。こんな事があつてはモウどうしたつて英國の社會に立てやしません。モウ此上は二人とも早くアメリカに渡つて了つた方が增しだ。（彼は此の世に棄てられたる二人の恥辱と痛苦とを、天も照覽あれと空を仰ぎ見る。）

ヴアイオレット（身分柄、斯樣な見ともない騒ぎを厭うて、ヘクトルをたしなめる。）　ヘクトル、そんな無理を云ふものぢやありません。マローンさんが私の手紙を開封なすつたのは當り前です。上書にマローン樣とあつたのですもの。

マローン　それ見ろ！お前に常識が無いんだ。ロビンソン嬢、どう

も有がたう。

ヘクトル　私もお禮を申します。そう云つて下さると實に有がたい。私の親爺なんぞ丸て分らないんてすから。

マローン（猛然として拳を握り堅め）　ヘクトル――

ヘクトル（道德的勇氣を發して少しも屈せず）　幾らあなたがヘクトル呼ばゝりをしたつて駄目てす。親展書は何處までも親展書てす。それをあなたがドウする事も出來やしない。

マローン（聲を荒らげ）　貴樣の口返答など聞くかい、己が！。

ヴアイオレット　シイッ！靜かにして下さいよ。皆が歸つて來たから。

親子とも口をつぐんで、無言のまゝ互に目を光らせる。タナアとラムスデンと小門より入り來る。オクテヴイアスとアンとも續いて入り來る。

ヴアイオレット　もうお歸り！。

タナア　今日はアルハムブラ城は休みの日だ。

ヴアイオレット　まあ馬鹿々々しい！。

タナアは前に進み出て、丁度ヘクトルと見知らぬ老人との間に來る。二人は今にも摑み掛らうと云ふ氣色である。タナアは一人づゝ其顏を見て暗に說明を求める。二人は六かしい顏をしてタナアの目を避け、無言の中に怒氣を包んで居る。

ラムスデン　ヴアイオレット、お前はあれほど頭痛がすると云つたのに、こんな日向に出て居て可いのかい。

ダナア　マローン君、君もモウ治つたかね。

ヴアイオレット　あら、私忘れて居た。初對面の方があるんだわねえ。マローンさん、あなたお父さんを皆に御紹介して下さいましな。

ヘクトル（斷乎たる羅馬的決意を以て）　いゝえ、私は紹介しません。是は私の父ぢやありません。

マローン（大いに怒つて）　お前は人様の前で自分の父親を非認するのだな。

ヴアイオレット　あら、どうぞモウそんなことは云はないで下さいな。

アンとオクチヴイアスは門の側にたゝずみながら、驚いた風に互に目くばせをする。そして遠慮げに厩木を登つて花園の方に行く、そこなら、此の騒ぎに立交らずしてそれを見物する事が出來るので。厩木に行く道で、アンはちよつと顔をしかめてヴアイオレットに無言の同情を送る。其時ヴアイオレットは小いテーブルを脊にして立ちながら、夫のヘクトルガ老人の身代に頓著せず、彌が上に道徳的氣焔を高めるのを見て、獨りでハラハラして居る。

ヘクトル　ローブンスン孃、誠に相濟みません。然し私は主義の爲めに爭つて居るのです。私は人の子であります。殊に從順なる子たらんことを期して居ります。然し何よりも先に私は一個の人間であります!!。ですから、父が私の私信を開封したり、或は私が幸ひにもあなたの御承諾を得て喜んで居るのに、父が差出がましくもあなたと結

婚してはならぬなどゝ申す以上は、私は斷然父と手を別つて自己の道を進むより外は無いのです。

タナア　ヴアイオレットと結婚する？。

ラムスデン　それは君、正氣ですか。

タナア　君は我々の云つた事を忘れたんか。

ヘクトル（向ふ見ずに）　君等の云つた事なんぞドウだつて構やしない。

ラムスデン（苦々しげに）　何といふ事だ！實に怪しからん！。（プンプンして門の方に飛びのく、怒氣の爲に兩臂を震はせながら。）

タナア　又ひとり氣違が出來た。こんな戀愛狂の手合は監禁して置かなくちやイケない。（彼はヘクトルに見切をつけて、花園の方に行きかゝる。然るにマローンは、斯うなつて見ると又別種の怒を發して、タナアの後につゐて行つて、壓迫的の語勢で以てタナアを引止める。）

マローン　今のお言葉は甚だ其意を得ない。ヘクトルが此の御婦人に對して左程まで不似合だと仰しやるんですか。

タナア　いやナニ、此の御婦人は既に結婚して居るんです。ヘクトルも知つてます。それで居て矢張讒語を云ふんです。早く連れて歸つて監禁して下さい。

マローン（痛烈に）　私が無智無學の行ひて叩き壞したといふ、此國の上流社會の風儀ですね、是れが。結婚した婦人に戀をしかけるとは何

事だ。（腹立たしげにヘクトルとヴアイオレットの間に來り、ヘクトルの左の耳に噛みつく樣に）貴樣は英國貴族の眞似をしたんだな。

ヘクトル　宜しい。あなたがそんな事を、餘計なお世話です。私の仕た事に對する道德上の責任は私が負ひます。

タナア（ヘクトルの右手に出て來り、目に一種の光を帶びて）　マローン君、エライ！。君も結婚なんといふ形式が道德て無いと云ふんだね。僕も贊成だ。然し不幸にしてヴアイオレットがそれに贊成しない。

マローン　失禮ながら私はそれを疑ふ。（ヴアイオレットに向ひ）ロビンソン夫人、と仰やるのかどうか知らないが、あなたが既に他人の妻てあるんなら、あんな手紙を私の息子に送る權利は無い筈てせうがね。

ヘクトル（怫然として）　モウ私も我慢が出來ない。お父さん、あなたは私の妻を侮辱したのてす。

マローン　お前の妻！。

タナア　君が其の秘密の夫か！。又一人道德上の詐欺者が現はれた！。（と、自分の額を輕く叩いて、マローンの椅子に坐りこむ。）

マローン　私は其の結婚を承諾して居ないよ。

ラムスデン　君は態と巧んて我々を詐欺に掛けたのてすね。

ヘクトル　宜しい。私も今まて隨分苦しい目を忍んて來たが、モウ澤山だ。ヴアイオレットと私は正に相違なく夫婦てある。それに就いて御說があるなら承たまはらう、サアどなたても。

マローン　それに就いて私の説は斯うだ。ヴアイオレットさんは一文なしの男と結婚なすつた。

ヘクトル　違ふ。勞働者と結婚したんだ。（ヘクトルのアメリカ流の發音が、此の簡單な、不人氣な、勞働者といふ言葉に絶大な意味を附した。）私は今日只今から自己の働きを以て生計を立てる。

マローン（腹立たしげに冷笑しながら）　そうだらうよ、大變今日は元氣がいゝ。ツイ昨日か、それとも今朝か、私の爲替を受取つた筈だからね。今にそれが無くなつて見ろ、あんまり大きな面も出來やしまい。

ヘクトル（懷中より一通の手紙を取出し）　サアこゝにある。（と、父の前にそれを突きつけて）　サア此の爲替を取つて、私の一身と關係を絶つて下さい。モウ爲替なんぞに用はない、あなたにも用はない。私は一千弗の金の爲に妻を侮辱するの特權を賣りはしない。

マローン（深く心持を惡くし、極めて不安の容態にて）　ヘクトル、お前はまだ貧乏の味を知らないんだよ。

ヘクトル（熱し切つて）　何アに、其味が知りたいんです。男一疋になりたいんです。ヴアイオレット、さあ一緒に家に行かう。何處までも苦樂を共にしよう。

オクテヴイアス（花園より芝原に飛降りて、ヘクトルの左手に走り來り）　ヘクトル君、別れる前に一度僕と握手して下さい。僕は實に深く君を尊敬し且つ愛慕します。（兩人握手する。オクテヴイアスは殆んど涙をこぼ

すまで感激して居る。）

ヴアイオレツト（是も殆んど涙をこぼしかけて居るが、それは當惑の涙である。）テヴイ、そんな馬鹿なこと云はないで下さい。ヘクトルだつてあなただつて、勞働者なんどに成れる柄ですか。

タナア（ヘクトルの右側の椅子より立上りながら）心配にや及ばないよ、マローン夫人。ヘクトルが眞逆どぶ浚ひになる氣遣はあるまい。（ヘクトルに向ひ）君、實際、資本に困る事はない。僕を友人と思つて呉れ玉へ。僕が出すよ。

オクテヴイアス（衝動的に）僕も出すよ。

マローン（恐ろしき嫉妬を起し）君等の汚れた金なんぞ借りるもんか。現在の親を置いてヘクトルが誰に出資を求めるもんか。（タナアとオクテヴイアスと共に首を縮める、オクテヴイアスは少し機嫌を損じ、タナアは金の問題の解決した事を喜んで。そしてヴアイオレツトは望みありげに首を上げる。）ヘクトルや、まあそんなにムキになるな。私の言つた事は惡かつた。何もヴアイオレツトを侮辱する積りぢや無かつた。あれは取消にする。ヴアイオレツトは如何にもお前に似合の妻だ。なアそれで可いだらう。

ヘクトル（父の肩を叩きながら）宜しい、お父さん。モウ何んにも仰るな。それで仲直りは出來た。只私はモウ誰からも金は貰ひません。

マローン（頼む樣な言葉付で）まあヘクトル、そんなに私に辛く當つて

呉れるな。お前が私と仲直りして饑ゑるよりか、いつそ喧嘩して金を取つて貰ひたいんだ。お前は世の中と云ふ者を知らないが、私は善く知つてるからな。

ヘクトル　いけません、イケません。モウ極つたんです。今更動かす事は出來ません。（頑として父の前を通りヴアイオレットの方に行く。）

さあヴアイオレット、もう私と一緒にホテルに移らう。そうして是からマローン夫人として世間に出る事にしよう。

ヴアイオレット　えゝ、ですけれど私、今ちよつと部屋に行つてダヴイスに荷物を片付けさせなくちや。あなたどうぞ先に行つて、庭を見晴した好い部屋を取つて置いて頂戴な。私三十分もしたら行きます

から。

ヘクトル　宜しい。ぢやお父さん一緒に食事を仕ませうね。

マローン（仲を直したいが山々にて）あゝ可いとも、可いとも。

ヘクトル　ぢや皆さん何れ又。（と、アンに向つて手を振る。此時、タナアもオクテヴイアスもラムスデンも皆花園のアンの處に行つて居る。ヘクトルは父とヴアイオレットを芝原に殘して小門より出て行く。）

マローン　ヴアイオレットさん、どうぞ彼子にあんな馬鹿を云はせない様にして下さい。ねえ、是非よろしく願ひますよ。

ヴアイオレット　私も彼人があんな片意地を云はうとは思ひませんでしたの。あんな風だつたら、私仕様がありませんわ。

マローン　なに失望するにや及ばない。家庭の壓迫は緩漫ではあらうが、確實です。今に屹度あなたが勝ちますよ。ねえ、是非そうして下さいよ。

ヴアイオレット　私出來るだけやつて見ます。あんな風にして態々貧乏になるなんて、丸でお話にも何もなりやしませんわ。

マローン　そうですとも。

ヴアイオレット（ちよつと何やら考へて）　あの先刻の爲替を私に下さいませんてせうか。いづれホテルの拂にも入るんてせうし、私何とかしてヘクトルに受取らせますから。尤も、今は駄目ですが、直き後てそうさせますから。

マローン（熱心に）　そう〳〵、そう〳〵。それが宜しい。（一千弗の爲替をヴアイオレットに渡し、猶老猾なる言葉付にて）　是はね、ほんのまだ獨り暮しの仕送だから、其の積りてね。

ヴアイオレット（濟まして）　えゝ、分りました。（とそれを受取り）　有がたう。それから、マローンさん、先刻お話しの、あの二つの邸――御殿の事ですがねえ。

マローン　えゝ。

ヴアイオレット　どうぞ私が見るまて極めないて置いて下さいましな。そんな物にやどんな疵があるか知れないんてすから。

マローン　宜しい。あなたに相談なして何んにも仕やしません。

御心配に及びません。

ヴアイオレット（丁寧に、さりながら感謝すると云ふ氣振もなく）有がたう。それが一番よござんすよ。（ヴアイオレットは濟まして別莊の方に向ふ。マローンは恭々しげに花園の上手の方までそれを送つて行く。）

タナア（マローンがヴアイオレットに別れを告げる時の、其のおどゝした態度に對してラムスデンの注意を引きながら）あの野郎が何千萬圓の富豪なんだからなア！あれで現代大勢力家の一人なんだからなア！出會頭の娘子に好い加減馬鹿にしられて、丸て狆ころか何かの樣に自由自在に引廻されてる！。僕なんぞにも今にあんな事があるんだらうか知ら。（と云ひつゝ、芝原に降り來る。）

ラムスデン（其後に續きながら）早くそうなつた方が可いのさ。

マローン（花園を通つて元の處に歸りながら、兩手をピシヤリと叩いて）ウン、あれならヘクトルにや立派な女房だ。己は公爵の姫君が十人來たつて彼子と取換へやしない。（芝原に降りてタナアとラムスデンの間に來る。）

ラムスデン（此の大富豪に對していと慇懃に）いやマローンさん、斯ういふ飛び離れた處でお目に掛らうとは、實に意外でした。アルハムブラ城でもお買取のお積りですかね。

マローン　えゝ、それも買はないものでもありません。西班牙の政府よりや私の方がモツトあれを善くするかも知れませんがね。然し今度來たのはそんな事ぢやありません。實を云ひますとね、一月ばか

り前に、二人の男が或株の賣物の話をして居るのを聞きましたがね。値段が折合はないんです。二人とも若くはあるし、慾は強いしするもんだから眼が見えないんですが、既にそれ丈の値踏をする價のある株なら、矢張り先方の言値だけの價もある筈なんてさァ、何ァに其の差金と云つたつて幾らの事でも無いんですからね。そこで私が慰みに手を出して、ツイ其株を買つたんです。所が、今日が日まで、私はまだ其の事業がどんな者だか、それも知らずに居る樣な譯です。何でも會社は此町に在つて、マンドザ株式會社と云ふんですがね、一體それが鑛山事業なのか、汽船事業なのか、それとも銀行事業なのか、それとも專賣特許物でもあるのか——

タナア　奴は人物ですよ。僕はよく知つてます。そして其の遣方が實に商賣的ですよ。どうです、是から我々と御一緒に自働車で此町を一廻りして、序でにマンドザを尋ねて見ませうか。

マローン　そう願へると結構ですが、然しツイまだお名前も——

タナア　こちらはローバック・ラムスデン君。あなたのお嫁さんの極古いお懇意の方です。

マローン　はゝあ、ラムスデンさん。どうか宜しく。

ラムスデン　いや私こそ。こちらはタナアさん。矢張り私共のお連です。

マローン　はゝあ、タナアさん。何分宜しく。

タナア　どうぞ宜しく。（マローンとラムスデンとは、至極睦まじげに小門より出て行く。タナアはオクテヴィアスを呼ぶ。オクテヴィアスはまだアンと二人で花園をウロついて居る。）　テヴイ！。（テヴィは厩木の處まで來る。タナアは大きな聲でそれに内證で告げる。）　君、ヴアイオレットは山賊の金主と結婚したよ。（タナアはマローンとラムスデンとに追ひつくべく、急ぎ足に立去る。アンはオクテヴィアスをいぢめて見ようといふ悪戯氣を出して、厩木の處まで徐ろに歩み來る。）

アン　テヴイ、あなたも皆と一緒に行くんぢや無くて？。

オクテヴイアス（忽ち眼に涙を浮べて）　そんなにあなたが僕を追ひやらうとするとねえ、僕は本當に胸を割かれる樣だ。（彼は泣顔を隠さうとして芝原に降りて來る。アンはそれをあやす樣な態度で、其の後について來る。）

アン　まあ！リキ・チキ・テヴイ。可愛相な人ねえ。

オクテヴイアス　全くですよ。モウ僕、默つちやゐられない。云はしてお呉れよ。僕アあなたを愛してるんだ。ねえ、僕アあなたを愛してるんだ。

アン　あらテヴイ、そんなこと駄目だわ。お母さんが私をジャックと結婚させる事に極めてるんだもの。

オクテヴイアス（驚き呆れて）　ジャックと！。

アン　無理だわねえ、あなた。

オクテヴイアス（漸く少し怒を帶びて）　それぢやねえアン、ジャックが

今日まで僕を弄んで居たことになるんだねえ。あなたと結婚しちやイケないつて、あんなにジャックが僕に勸めて居たのは、實は自分であなたと結婚する積りで居たからだと云ふ事になるんだね。

アン（びつくりして）　あらイケないわ。私がそんなこと云つたなんてジャックに思はせちや厭よ。ジャックがそんな氣で居るなんて、私夢にも思つたこと無いわ。けども、お父さんの遺言で見ると、お父さんは私がジャックと結婚するのを望んでゐらしつたし、そしてお母さんが又それに極めてるんですもの。

オクテヴィアス　然しあなたは何もそう一々兩親の望み通りにして、自分の身を犧牲にしなくちやならない事は無いでせう。

アン　だつて、お父さんは私を可愛がつて呉れたし、お母さんも私を可愛がつて呉れるんだから、二人の云ふ通りになる方が、私の自分勝手にするよりか、身の爲になるんでせう。

オクテヴィアス　それはねアン、僕はよく知つてるさ。あなたが自分勝手をしないのは實に感心だ。然し――勿論僕は今、自分の利益の爲に云つてるのぢやあるけれど――此の問題には又別の方面があるだらうぢやないか。あなたが若しジャックを愛してないとすれば、それて居てあれと結婚するのは、あれに對して不都合にも當るし、若し又、あなたが僕を愛して呉れる事が出來るのなら、僕の幸福とあなたの幸福とを態と一緒に破つて了ふのも、それも又餘り無理な事ぢや無いか

知らん。

アン（少し氣の毒なといふ氣持でオクテヴィアスの顔を見やり）　テヴイ、あなたはねえ、ほんとに好い人だわねえ。ほんとに好い子だわねえ。

オクテヴイアス（恥辱を感じて）　僕は只それ丈なの？。

アン（氣の毒とは思ひながら又少し意地わるく）　それ丈がエライ事だわ、本當に。あなたは何時までゞも私の踏んだ土を拜んで下さるわねえ。

オクテヴイアス　あゝそうとも。滑稽に聞えるかも知れないが、誇張でも何でもない。僕は拜むよ、何時までゞも拜むよ。

アン　何時までゞもなんて云つちや、ねえあなた、隨分大變だわ。そうすりや私、何でせう、あなたが私のこと神樣のように思つて下さると、私いつまでか其のお務をしなくちやならないんてせう。だけど二人が結婚してしまつちや、モウそんなこと出來やしないと私思ふわ。だから私がジャックと結婚すりや、あなたは何時までも幻滅（ディスイリュージョン）が無くて可（い）いわ。せめて私がお婆さんになる迄でも。

オクテヴイアス　年寄になるのは僕だつて同じ事ぢやないか。例へば僕が八十になつたとしてさ、其時、僕の愛する人の白髮の一筋は、美しい若盛りの、房々した黃金の髮よりも、モット餘計に僕の心を躍らせるに相違ない。

アン（大いに感動して）　詩だわねえ、そう云ふと。全く詩だわ。私そ

んなこと聞くと、何だか急に斯う、珍らしい前世の聲がする樣な氣がし
て、此の不滅な靈魂の確かな證を見る樣な心持になりますわ。

オクテヴィアス　あなたそれを信じて呉れる？。

アン　だけど、それを信じようとするにや、あなたが私を愛してねえ、
そして私を棄てなきや駄目よ。

オクテヴィアス　そうかなア！。（急いで小いテーブルの前に坐り、兩手
で顏を蔽ふ。）

アン（深く思ひこんだる樣子）　テヴイ。私モウどうあつてもあなたの
其の幻しを壞したくないの。私あなたと一緒になる事も出來ないし、
又逃す事も出來ない。だから私、斯うするのが一番あなたに好いと思
ふわ。あなたねえ、一生涯、私の爲に、其の優しい心持で獨身で居て下さ
いな。

オクテヴィアス（やけの氣味にて）　それほどなら僕はモウ死んで了
ふ。

アン　あら、そんなこと私厭。そりやあんまり酷いわ。あなた獨身
だつて、そんなに惡い者ぢや無くてよ。女の人達には親切にするし、オ
ペラにはよく行くし、失戀した男なんて云や、此の倫敦ぢや隨分面白い
言草だわ、お金さへ相當にあればねえ。

オクテヴィアス（よほど是で熱は冷めたが、それでも自分では只勉めて氣
を取り直したと思つて居る。）あなたは親切からそう云つて呉れるんだ。

それは僕にも分つてるよ。屹度ジャックに教へられたんでせう、僕に對しちや皮肉が一番の適藥だといふ事を。（靜かに威嚴を持つて立上る。）

アン（コツソリ其の樣子を窺うて）　ソーラ、私もう大分あなたの幻しを消したでせう。私それが怖いの。

オクテヴィアス　だつてあなたは、ジャックの幻しを消す事は何とも思はないぢやないか。

アン（いたづら氣の思にウツトリして、顏の色を輝かせながら、小聲にて）　そんなこと出來やしないわ。ジャックは私に對して幻しなんど持つてないんだもの。だからジャックにや、又他の方で不意打を喰せなくちやならないの。惡い印象を取直すんなら、高い理想にお務するよりか餘つぽど樂なんだもの。本當に私いつかビックリするほどジャックを嬉しがらせてやらなくちや。

オクテヴィアス（再び元の沈鬱なる失望の態に返り、而も我れ知らず、早や既に其の失戀と其の込みいつた立場とを味つて居る。）　全くだ。あなたは此先始終ジャックを嬉しがらせるんだ。それに、あの馬鹿が！あなたに酷い目に會ふかと思つてる。

アン　えゝ、そこが今て六かしい所なんですよ。

オクテヴィアス（義心を示して）　それぢや僕から、あなたがジャックを愛してると話して上げようか。

アン（急いで）　イケませんよ。又逃げ出すから。

オクテヴイアス（びっくりして）　ぢやあなた、厭だと云ふ男と結婚する積りなの？。

アン　まあテヴィ！あなたは分らない人ねえ。こちらて本氣に掛りさへすりや、厭だなんと云ふ男があるもんてすか。（お轉婆らしく笑ふ。）あなたビックリしたてせう。だけど、あなたはモウ自分ぢやそんな危ない目にや會はないんだから、そこ丈にチョット滿足があるてせう。

オクテヴイアス（呆れて）　滿足！。（そして責める樣に）　あなたが僕にそんな事を云ふのか。

アン　あなた、そんな事が本當に辛いのなら、それよりモット辛い事は望まない筈てすわねえ。

オクテヴイアス　もつと辛い事を僕が望んだらうか。

アン　あなた私がジャックを愛してるつて、話してやらうと云ふぢやなくて？。本當に献身的だわねえ、それは。けども、それにもキットどもね。あなたは丁度、あの、自分の胸を態と痛い刺に押しつけて鳴くといふ鳥の樣だわ。

オクテヴイアス　何、そりや單純な話さ。僕はあなたを愛する。それてあなたを幸福にしてあげたい。所があなたは僕を愛しない。そこて僕自身ではあなたを幸福にする事が出來ない。けれども、他人を助けてあなたを幸福にする事だけは出來る。

アン　成程、そう云へば單純に聞えます。けども私疑ふんですよ、自分のする事の本當の譯が自分に分るものでせうか。本當に單純な事柄と云つたら、自分の欲しい物を眞直に行つて引つたくつて來る位なものでせう。それでねえあなた、私あなたを愛しては居ないでせうがねえ、折々どうかしてあなたを男にして上げたいと云ふ氣がするんですよ。女に掛けては、あなたは本當に甘いんだから。

オクテヴイアス（稍や冷かに）　其點に就いちや、僕は此のまゝで澤山です。

アン　それぢやあなた女から離れて了つて、そして女の夢ばかり見て居なくちや駄目ですよ。私どんな事があつたつてあなたと結婚しやしないから。

オクテヴイアス　勿論モウそんな氣は持つちや居ないさ。僕は唯僕の不運に甘んずるばかり。然しそれが僕に取つて如何に辛いか、迚もあなたにや分るまいと思ふ。

アン　あなたは本當に氣が弱い。ヴアイオレットに比べて、どうしてこんなに違ふかと不思議でならない。ヴアイオレットは釘の樣に堅いんだが。

オクテヴイアス　いや、そうぢやない。ヴアイオレットも心の底はそりや本當に女らしいんだから。

アン（少し怒へかねて）　あなた妙な言方だわねえ。思慮分別があつ

てさ、キチ〳〵と何でも事務的にやつてのけてさ、そして利口な賢い人と云ふのが、それが女らしくなくて？。あなたヴァイオレットを役立たずのグズにしたくつて？。それともモット悪い私の様な者にしたくつて？。

オクテヴイアス　もつと悪い、あなたの様な者とは、そりやドウいふ意味？。

アン　何ねえ、そりや無論冗談ですがねえ、兎にかく私大いにヴァイオレットを尊敬するわ。彼人は何時でも自分の意を通すんだもの。

オクテヴイアス（吐息をついて）　あなたも矢張そうだ。

アン　そりやそうだけど、彼人のは人に甘い言葉を掛けないで、それを遣るんだから、――人の感情を動かさないでそれを遣るんだからエライ。

オクテヴイアス（兄らしき冷かさを以て）　そりや誰だつて、ヴァイオレットに對してそんなに感情を動かす者はありやしまい。綺麗は綺麗かも知らないが。

アン　そうぢやありませんよ。ヴァイオレットがそうさせようと思や、矢張そうなるんですよ。

オクテヴイアス　だつて、チヤンとした立派な婦人が眞逆そんな風に態と企んで、男の心を取る様な事は仕やしまい。

アン（兩手を高く頭の上に投げ上げる様にして）　おうテヴイ、テヴイ、リ

キ・チキ・テヴイ、あなたと結婚する女は堪らないわねえ。

オクテヴイアス（此名を呼ばれて再び情を燃し）　おやどうして、どうしてそんなこと云ふの？。僕を苦しめないで下さい。僕にやサッパリ分らない。

アン　若し其女が嘘を吐いたら、男に對してワナを掛けたりしたらあなたドウしますよ。

オクテヴイアス　僕にそんな女と結婚する事が出來るとあなたは思ふか。是まであなた程の人をよく知つて愛した僕に。

アン　ふゝん！そうねえ。其人が利口だつたら、向ふでそうさせやしないでせうよ。それで丁度可いわねえ。時に私モウ斯うしちや居られない。あなた勘忍してやると云つて頂戴な。そしてモウ此事はどうぞ是きりにして頂戴な。

オクテヴイアス　何も僕が勘忍する事はありやしない。それで此事は是きりさ。よし傷口は殘つて居たつて、モウ血の出る處をあなたに見せやしない。

アン　何處までも詩的なのねえ。左様なら、テヴイ。（と云つて、チョイとテヴイの頰を突ッつく。猶キッスを一つ仕ようかといふ氣も出たが、又他の厭氣がさしてそれは止める。そして結局、逃げだして花園から別莊に入る。）

オクテヴイアスは再びテーブルに倚りかゝり、兩腕に頭を支へて靜かに啜泣をする。そこにグラナダの町を一廻りして、色々買物をして來たホワイトフイルド夫人が、小物の一パイはいつた網嚢を片手に持つて、門から這

入つて來て彼を見つける。

ホワイトフイルド夫人（オクテヴイアスの側に駈け寄り、其の頭を上げさせて）どうしたの、テヴイ？。氣分でも惡いのかい。

オクテヴイアス　いゝえ、何でもありません。何でもありません。

ホワイトフイルド夫人（猫氣遣はしげにオクテヴイアスの頭に手を掛けて）だつて泣いてるぢやないの？。ヴアイオレットの結婚の事でも考へてるの？。

オクテヴイアス　いゝえ、そうぢやありません、あなた誰からヴアイオレットのこと聞きました？。

ホワイトフイルド夫人（漸くオクテヴイアスの頭に掛けた手を離して）私今ローバックさんと、あの恐ろしい愛蘭土の老人とに會つたの。あなた本當に惡かないの。一體どうしたの？。

オクテヴイアス（後ろらしく）何でもありやしませんよ。一疋の男が失戀したと云ふ丈の事です。馬鹿々々しいでせう。

ホワイトフイルド夫人　だつて、どうしたと云ふのです。アンが何か惡いことでもして？。

オクテヴイアス　なに、アンが惡いんぢやありません。そして又あなたに向つて不足なんぞ云ふ積りは少つともありやしません。

ホワイトフイルド夫人（びつくりして）不足つて、何の不足を？。

オクテヴイアス（なだめる樣に夫人の手を握りしめ）何でもありませ

んよ。あなたに不足なんぞ云ふんぢやないと云つたぢやありませんか。

ホワイトフイルド夫人　だつて、私何んにも仕やしないのに。一體どうしたといふのです。

オクテヴイアス（悲しげに微笑して）あなたに分りませんか。そりやあなたが私を棄てゝ、アンの夫にジャックをお擇びなすつたのは御尤もです。ですけれど、私はアンを愛してます。それが只辛いのです。

（立上りて夫人と離れ、芝原の中央に來る。）

ホワイトフイルド夫人（急いで其後に追ひすがり）私がアンをジャックと結婚させたがつて居るとでも、アンが云つたのですか。

オクテヴイアス　ハア、私はそう聞きました。

ホワイトフイルド夫人（ちょつと考へて）　ふん、それだと本當に私お氣の毒に思ひますよ。それはね、アンが自分でジャックと結婚したいと云ふ事なんですよ。アンが私の言ふ事なんぞ、私の望みなんぞ、何と思ふものですか。

オクテヴイアス　でも、アンがそうと思はない事をそうと云やしますまい。あなただつて眞逆アンが――嘘をつくとはお思ひなさらないでせう。

ホワイトフイルド夫人　まあそりやドウでもいゝ。だけど私、そう思ふ。若い人達で、あなたの樣に餘んまり世間を知らなくても困るし

さりとてジャックの樣に知り過ぎても困るし。

（そこにタナアが歸つて來る。）

タナア　あゝ、やつとマローン老人を片付けて來た。マンドザ會社に連れて行つて紹介してやつたが、今頃はあの山賊が二人で談判をやつてるだらう。おやテヴィ！君どうかしたのかい？。

オクテヴィアス　あゝそうだ、僕ア顏でも洗つて來よう。（夫人に向ひ）あなたのお望みをタナアにお話し下さい。（タナアに向ひ）君、僕が云ふのだ、聞き玉へ。アンも承知してるよ。

タナア（オクテヴィアスの樣子に不審を抱き）　アンが何を承知してると云ふんだ？。

オクテヴィアス　ホワイトフイルド夫人のお望みの事をさ。（沈鬱な身振で別莊の方に歩み去る。）

タナア（夫人に向ひ）　何だか妙な工合ですね。あなたのお望みとありや、そりや何でもヤリますがね。マア一體何事です。

ホワイトフイルド夫人（嬉しくて少し鼻聲になり）　有がたうよ。（と、そこに腰かける。タナアは彼方のテーブルより今一つの椅子を持ち來り、夫人の側に寄つてそれに腰かけ、膝に兩臂を突いて一心に夫人の言葉を聞く。）どうしてこんなに人さんの子達は私に親切にして呉れるのに、自分の子供は少つとも私の事を思つて呉れないのだらう。だから私だつて、あなたや、テヴィや、ヴアイオレットに對しちや、彼是世話も出來るんだけれど、